

平成 25 年度

社会調査実習報告書

第 2 号

淑徳大学
コミュニティ政策学部

はしがき

本報告書は、コミュニティ政策学部コミュニティ政策学科の「社会調査実習」を履修した学生の調査研究の成果である。

本学コミュニティ政策学科では、専門科目の分野別教育目標の1つとして、「社会事象や社会に関連する諸事実を明らかにするために、データの収集から分析にいたるまでの基礎的な事柄を理論と方法の両面から理解する」ことを掲げている。そして、コミュニティ研究の方法としての社会調査について、学生が体系的に学習することを可能とするカリキュラムが編成されているところに大きな特徴がある。1年次前期に「社会調査論」、1年次後期に「社会調査法」を履修し、2・3年次前期に「統計解析法」「社会統計学」、2・3年次後期に「量的解析法」を履修する。「社会調査論」「社会調査法」「統計解析法」「社会統計学」「量的解析法」の計5科目10単位を修得済みであることが、3・4年次前期の「社会調査実習」の履修の条件となる。「社会調査実習」は、社会調査法と統計解析について1～3年次で身につけてきた学習内容の集大成として、個別の研究テーマの設定から、テーマに関する仮説の検討、調査の方法的枠組みと分析方法の検討、調査対象の選定と調査票の作成、実査、データの集計、結果の解析、そして報告書による成果の公表にいたる一連の過程に、学生が主体となって取り組むものである。

平成25年度の担当教員は舛渕俊子、社会調査助手は佐藤麻衣であり、履修学生は2名であった。2名はすでに(社)社会調査協会の「社会調査士資格(見込み)」の認定を得ており、この「社会調査実習」の単位取得をもって、資格取得に必要な科目を履修済みとなる。

今年度の社会調査実習では、「子どもを安心して産み育てることのできる環境づくり」をテーマに、千葉市市役所・千葉市子ども交流館・千葉市教育委員会・各小中学校の先生方のご協力をいただき、小学生を持つ保護者の方々に、「子育てに関するアンケート」を実施した。千葉市でも子育て中の方々を支援するための育児サークルの設置をすすめている。だが、大半は乳幼児や未就学児に限定されており、社会環境の変化や子どもの成長につれ「親」として多様な対応が必要となる「小中学生」の保護者を対象とした子育てサークル等はほとんど見受けられない。また、小学校入学後の子どもを持つ保護者を対象とした子育てに関する調査はあまり行われていない。そこで、本調査では、小中学生をもつ保護者の方々の子育ての悩みや不安、親子関係のありようをお伺いし、併せて2007年10月に千葉市街地(中央区)に開設された「千葉市子ども交流館」やそこで行われている事業に対するニーズをお教えいただきたく、今回の調査を企画した。

なお、今回の調査で保護者を対象とするにあたり、千葉市中央区内の全小学校および全中学校に通学している各2年生の児童・生徒を介して調査票を保護者に手渡してもらう方法をとった。そのため、千葉市教育委員会のご協力・ご了解はもとより、小中学校の校長先生はじめクラスの先生方には多大なご協力をいただいた。さらには、児童・生徒が学校から持ち帰った調査票にお忙しい時間を割いてご回答・ご協力くださった保護者の方々に対し、心より感謝申し上げる。今回の調査は、調査対象となった保護者の方々だけでなく、28校にのぼる中央区内全小中学校の先生方から、保護者に調査票を手渡してくれた児童・生徒まで、多くの方々のご協力によって初めて成し遂げることができた。あらためて厚くお礼申し上げる。

最後になったが、短い期間ながら、学生たちは、調査票の作成からデータの集計・分析、報告書の執筆まで、熱心に懸命に取り組んだ。本調査の成果が、子育て環境の向上とよりよい地域づくりの一助となれば幸いである。

平成26年3月

コミュニティ政策学部教授 舛渕俊子

目 次

はしがき 梶潟俊子 i

第1章 問題意識と研究テーマ 加藤郁哉・和田直也 1

第2章 統計的調査の概要 和田直也 2

第3章 調査対象の特性 加藤郁哉 5

第4章 保護者の親子関係意識と子どもと過ごす機会 加藤郁哉 8

第5章 保護者の外向性・子育て環境が子育て不安に与える影響
..... 和田直也 22

第6章 千葉市の子育て支援と市民のニーズ 佐藤麻衣 34

あとがき 佐藤麻衣 56

付録

基礎集計表 57

調査票 77

第1章 問題意識と研究テーマ

B1C052 加藤郁哉 B1C114 和田直也

日本が抱える課題の一つに少子化がある。少子化によって労働力の減少や年金負担の増加等、社会の活力の低下が懸念されている。少子化の背景には、女性の職場進出や子育てと仕事の両立の難しさ、育児の心理的・肉体的負担、住宅事情、教育費等の子育てコストの増大などがあげられる。

少子化を緩和するための対策として、今後、子育てと仕事の両立支援の推進・子育てのための住宅および生活環境の整備等、さらに多様な公的支援が重要になっていくと考えられる。その一環として、地域の様々な子育て支援サービスの充実とネットワークづくりの推進があり、千葉市内には、子育て支援センターが7ヶ所、子育てリラックス館が10ヶ所設置されており、子育て支援施設の基幹施設として子育て支援がなされている。

今回は、小学生・中学生の子どもを育てている保護者を対象に調査し、保護者の親子関係意識と子どもと過ごす機会、保護者の外向性・子育て環境が子育て不安に与える影響という2つのテーマを設定した。

まず、保護者が親子で過ごす機会の多寡についてどのように意識しており、この意識が子どもに対する意識にどのように影響をもたらすのか関心を持った。そこで、保護者の感じる子どもと過ごす機会の多寡と、保護者の感じる親子関係の良好性との関連を分析する。なお、保護者の親子関係意識の良好性については、保護者の子どもに対する把握（子どもの好きな食べ物、得意な科目等）・承認意識（子どもはよく親の言うことを聞いてくれる、お手伝いをしてくれる等）を通して調べていく（第4章）。

次に、保護者の外向的な性格や子育て環境が子育てをするうえで感じる不安にどのような影響を与えるか興味をもった。そこで、保護者の外向性、保護者同士のやりとり、子育ての話ができる友人の人数、親族との同居、子どもの人数が子育てをしているなかで感じた不安、子育ての不安の原因とどのように関連しているかについて分析していく（第5章）。

第6章では、千葉市の子育て支援の概要、および子育て支援に対する千葉市民のニーズ、とくに子育てサークル（「子育てばば・ままサークル」）へのニーズについて分析を行った。

【参考文献】

内閣府編, 2011, 「第1部 子ども・子育て支援策の現状と課題」『平成23年度 少子化の状況及び少子化への対処施策の概況（子ども・子育て白書）[概要]』

(<http://www8.cao.go.jp/shoushi/whitepaper/w-2012/24pdffgaiyoh/24gaiyoh.html>, 2014年1月24日).

内閣府編, 2012, 「第1部 第1章 少子化の現状」『平成24年度 少子化の状況及び少子化への対処施策の概況（少子化社会対策白書）[概要]』

(<http://www8.cao.go.jp/shoushi/whitepaper/w-2013/25pdffgaiyoh/pdf/s1.pdf>, 2014年1月26日).

第2章 統計的調査の概要

B1C114 和田直也

2. 1 調査の目的と調査票の概要

2. 1. 1 調査の目的

この調査は、小中学生の子どもを持つ保護者の子育てに関する不安や悩み、子どもとの過ごし方、「千葉市子ども交流館」の認知度やそこで行われている事業のニーズ等を尋ねることで、子育ての実態に迫り、支援策を探ることを目的としている。

2. 1. 2 調査票の概要

上記の目的をもとに、調査を行うにあたり、以下の質問項目を設定し、調査票を作成した（巻末「調査票」参照）。

保護者の外向性を尋ねる項目（A 1）

子育てをするうえで感じる不安の程度を尋ねる項目（B 1）

子育てをする中で感じる不安の原因を尋ねる項目（B 2）

子育てに関する話ができる友人の人数を尋ねる項目（C 1）

保護者同士のやり取りの頻度を尋ねる項目（C 2）

アンケートを持ち帰った子どもの学齢を尋ねる項目（D 1）

子どもと過ごす機会の多寡を尋ねる項目（D 2）

子どもに対する把握意識・承認意識を尋ねる項目（D 3）

「子ども交流館」の認知を尋ねる項目（E 1）

「子ども交流館」を知った経緯を尋ねる項目（E 1付問）

「子ども交流館」を訪れたことがあるかを尋ねる項目（E 2）

「子ども交流館」を訪れた理由を尋ねる項目（E 2付問）

子どもがここ1年の間に「子ども交流館」を利用した頻度を尋ねる項目（E 3）

子どもが「子ども交流館」を利用することに対する保護者の意識を尋ねる項目（F 1）

子どもが「子ども交流館」を利用することで保護者が期待している事柄を尋ねる項目
(F 2)

「子ども交流館」が親子で参加できる講座を開いた場合の参加希望の有無を尋ねる項目
(F 3)

「子育てサークル」への参加希望の有無を尋ねる項目（G 1）

「子育てサークル」の目的に対する保護者の興味の程度を尋ねる項目（G 2）

「子育てサークル」の実施形態に対する保護者の興味の程度を尋ねる項目（G 3）

「子育てサークル」に対し保護者が期待している事柄を尋ねる項目（G 4）

子育てに関する学習テーマへの興味の程度を尋ねる項目（G 5）

性別を尋ねる項目（H 1）

年齢階級を尋ねる項目（H 2）

同居家族員を尋ねる項目（H 3）
子どもの人数を尋ねる項目（H 4）
子どもの学齢を尋ねる項目（H 5）
就業状況を尋ねる項目（H 6）
就業時間を尋ねる項目（H 6付問）

2. 2 調査の名称と調査の主体

2. 2. 1 調査の名称

「子育てに関するアンケート」

2. 2. 2 調査の主体

淑徳大学コミュニティ政策学部

2013年度「社会調査実習」受講生 加藤郁哉・和田直也

調査責任者

淑徳大学教授 棚瀬俊子

社会調査助手 佐藤麻衣

2. 3 調査対象

2. 3. 1 母集団

千葉市中央区内の小学校、中学校に通っている児童・生徒をもつ保護者。

千葉市中央区を選定したのは、千葉市中央区がさまざまな住民が混住する都市近郊の特色を表わしていると考えられるためである。

小中学生の保護者を選定した理由は、小中学生の保護者を対象とした子育てに関する調査はあまりおこなわれておらず、また、小中学生の保護者を対象とした子育てサークルはあまり見られないのが現状であるため、本調査において、小中学生をもつ保護者の悩みや不安を聞き、千葉市子ども交流館やそこで行われている事業へのニーズを聞くことで、子育て支援の一助となればと考えたためである。

2. 3. 2 対象者

千葉市中央区内にある小学校全19校、中学校全9校に通学している各2年生の児童・生徒の全保護者を対象とした。小学校と中学校の双方を選定したのは、子どもの学齢によって抱えてくる問題が変わってくると考えたためである。また、2年生の児童・生徒の保護者を対象としたのは、入学したばかりの1年生では、まだ学校生活が安定していないとみられるためである。

保護者を対象とするにあたり、千葉市中央区内にある小学2年生1554人、中学2年生1276人を介して調査票を保護者に手渡してもらうことにした。

2. 4 統計的調査の方法

千葉市教育委員会の了解を得て、千葉市中央区内の全小中学校に調査協力のお願いをした。結果的にすべての小中学校から協力が得られたため、各学校に調査票を郵送でまとめて送付し、2年生の児童及び生徒にクラスの先生から配布してもらい、保護者に手渡し回答してもらう方法をとった。回収方法は、回収用の封筒を用意し、保護者が記入した後に郵送によって、直接淑徳大学に送ってもらった。

調査時期 2013年7月5日～7月16日

(実際には、9月5日までに返送されたものはすべて集計対象とすることとした)

回収結果 有効回収数（回収率）：765票（27.0%）

第3章 調査対象の特性

B1C052 加藤郁哉

本章では、今回の調査において対象とした小学生と中学生の児童・生徒の保護者（親）の特性を子どもの学齢別に比較していく。

3. 1 対象者の子どもの学齢

表3-1 学齢 単位(%)

	小学生	中学生	計	
全体	69.5	30.5	100.0	758人

今回の調査では、小学生の保護者が69.5%、中学生の保護者が30.5%で、子どもの学齢が小学生の保護者が約7割を占めた。

3. 2 対象者の性別

表3-2 性別 単位(%)

	男	女	計	
全体	4.6	95.4	100.0	755人
小学生の親	4.2	95.8	100.0	526人
中学生の親	5.7	94.3	100.0	229人

今回の調査では、女性の保護者が全体の9割以上を占め、男性の保護者は5%足らずであった。また、子どもの学齢が小学生・中学生どちらであっても保護者の性別分布はほとんど変わらないが、中学生の保護者では小学生の保護者と比べて男性が占める割合がやや高かった（小学生の保護者：4.2%、中学生の保護者：5.7%）。

3. 3 対象者の年齢

表3-3 年齢階級 単位(%)

	20代	30代	40代	50代以上	計
全体	1.9	42.8	51.7	3.6	100.0 754人
小学生	2.7	55.4	41.0	1.0	100.0 525人
中学生	0.0	14.0	76.4	9.6	100.0 229人

全体では30代（42.8%）と40代（51.7%）が多く、合わせて9割を超えていた。子どもの学齢別では、小学生の保護者では30代（55.4%）、中学生の保護者では40代（76.4%）の占める割合が高かった。

3. 4 配偶者との同居

表 3-4 配偶者との同居 単位 (%)

	同居している	同居していない	計	
全体	89.1	10.9	100.0	758 人
小学生の親	91.3	8.7	100.0	527 人
中学生の親	84.0	16.0	100.0	231 人

今回の調査では、配偶者との同居の有無について質問をした。「同居していない」には離婚、死別の他に単身赴任等で配偶者と同居していない人を含む。

結果、全体では配偶者と「同居している」が約 9 割を占め、配偶者と「同居していない」は 1 割程度であった。

子どもの学齢別にみると、配偶者と「同居している」保護者の割合は、小学生の保護者 (91.3%) のほうが中学生の保護者 (84.0%) と比べてやや高かった。

3. 5 対象者の子どもの人数

表 3-5 子どもの人数 単位 (%)

	1人	2人	3人	4人以上	計	
全体	17.9	57.1	20.3	4.6	100.0	753 人
小学生の親	17.3	59.4	19.6	3.6	100.0	525 人
中学生の親	19.3	51.8	21.9	7.0	100.0	228 人

全体では、子どもが 1 人いる保護者 (17.9%) が約 2 割、2 人いる保護者 (57.1%) が約 6 割、3 人以上いる保護者 (24.9%) が約 25% 程度を占めた。

3. 6 対象者の就業状況

表 3-6 就業状況 単位 (%)

	会社員	公務員	自営業	専門職	パート・ アルバイト	働いている －その他	非就業	計
全体	22.5	5.1	4.5	1.2	26.3	3.1	37.4	100.0 752 人
小学生の親	22.7	5.3	3.1	1.3	22.7	2.9	42.0	100.0 524 人
中学生の親	21.9	4.4	7.9	0.9	34.6	3.5	26.8	100.0 228 人

全体では非就業者が約 4 割を占め、働いている保護者のなかでは、「パート」と「会社員」がそれぞれ 25% 前後を占めた。

子どもの学齢別にみると、働いていない保護者の割合は、子どもの学齢が小学生の保護者 (42.0%) のほうが中学生の保護者 (26.8%) よりも 15% 程度高かった。また、「パート」として働く人の割合において、子どもの学齢が中学生の保護者 (34.6%) のほうが小学生の保護者 (22.7%) より 1 割程度高かった。

表3－7 一週間の就業時間

	10時間未満	10時間以上 40時間以下	40時間超	計	
全体	9.1	69.6	21.3	100.0	461人
小学生	10.3	71.0	18.7	100.0	300人
中学生	6.8	67.1	26.1	100.0	161人

就業時間の単純集計表を作成する上で、まず、1週間の就業時間は労働基準法第32条で原則として40時間以下と定められているため、40時間超と以下に分けることとした。そして40時間以下で働いている就業者のうち、「10時間未満」、「10時間以上40時間以下」、「40時間超」の3つに区切った。

全体では、「10時間未満」で働く保護者が9.1%、「10時間以上40時間以下」が69.6%を占めた。

子どもの学齢別では、「10時間未満」で働く保護者は、小学生の保護者(10.3%)のほうが中学生的保護者(6.8%)より5%程度多かった。

「10時間以上40時間以下」では小学生の保護者(71.0%)のほうが中学生的保護者(67.1%)より5%程度多かった。

「40時間超」では小学生の保護者(18.7%)のほうが中学生的保護者(26.1%)より1割弱少なかった。

第4章 保護者の親子関係意識と子どもと過ごす機会

B1C052 加藤郁哉

4. 1 問題意識

子育てをすると、子どものみならず保護者も成長する。ここでいう保護者は、子どもの親だけでなく親子の関係ではなくても実際に子どもを育てている者を指す。子育てにおいては、子どもが大きくなるにつれ、保護者もそれまでのやり方では通用しなくなり、そのつど考えを改めることが必要な場合もある。そうして考えてみると、子育ての過程とは、子どもの成長過程に合わせてそのつど新たな関係を構築していく過程であるとも言えるだろう。

森下正康（1996）によれば、親子関係とは、親と子どもの二人の相互のかかわりあいの結果である。特に、子どもの社会的行動については、親の態度や行動、親子間の相互のかかわりが問題となる。つまり子どもの行動を規定する上で重要なのは、子どもが認知している保護者の養育態度であるという。このことから、子どもが良好な親子関係を築けていると感じることが良好な親子関係に繋がるといえる。

また、藤村美子・秋葉英則（1997）によれば、親子関係における母子間の認知差は、小学生と母親の場合、親子関係が良好であると子どもが認知している場合には小さく、そうでない場合に大きいという。

今回は保護者（親）の側から子どもとの過ごし方と保護者の感じる親子関係の良好性との関係を調査することにした。なお、保護者の親子関係意識の良好性については、保護者がどの程度子どものこと（子どもの好きな食べ物、得意な科目等）を把握していると感じているのか、および承認できていると感じているのか（子どもはよく親の言うことを聞いてくれる、お手伝いをしてくれる等）を通して調べた。そして子どもと過ごす機会と保護者の親子関係意識の良好性との関係を分析する。そのためには、次節に掲げる4つの仮説を設定し検証していく。

4. 2 仮説

- I 子どもと過ごす機会が多いと感じている保護者のほうが子どもに対する把握意識が高い。
- II 子どもと過ごす機会が多いと感じている保護者のほうが子どもに対する承認意識が高い。
- III 小学生の保護者よりも中学生の保護者のほうが子どもに対する把握意識が低い。
- IV 小学生の保護者よりも中学生の保護者のほうが子どもに対する承認意識が低い。

4. 3 子どもと過ごす機会の多寡と機会共有意識

4. 3. 1 子どもと過ごす機会の多寡

表 4-1 子どもと過ごす機会の多寡

単位 (%)

	あてはまる	どちらかどまらない	どちらかどまらない	あてはまらない	あてはまる	あてはまらない	計
a 子どもとよく会話をする	48.2	42.1	9.5	0.3	90.3	9.7	100.0 760人
b 子どもとよく一緒にご飯を食べる	72.9	21.8	4.7	0.5	94.7	5.3	100.0 760人
c 子どもとよく遊ぶ	16.8	39.2	38.0	6.0	56.0	44.0	100.0 761人
d 子どもとよく一緒に勉強をする	21.6	40.2	28.4	9.9	61.8	38.2	100.0 761人
e 子どもとよく一緒にテレビを見る	34.7	44.7	17.1	3.6	79.4	20.6	100.0 761人
f 子どもとよく買い物に行く	38.8	39.6	18.3	3.4	78.3	21.7	100.0 761人
g 子どもとよくレジャーや博物館等に出かける	35.2	36.5	23.5	4.7	71.8	28.3	100.0 761人

表 4-1 をみると、子どもと過ごす機会として「b 子どもとよく一緒にご飯を食べる」に「あてはまる」と回答した人が 94.7% と最も多く、次いで「a 子どもとよく会話をする」が 90.3% と多かった。「あてはまる」と回答される割合が少なかったのは「c 子どもとよく遊ぶ」(56.0%)、次いで「d 子どもとよく一緒に勉強をする」(61.8%) であった。

4. 3. 2 機会共有意識変数の作成

本項では仮説 I・II で使用する「子どもと過ごす機会が多いと感じている程度の強さ」を測るための尺度を作成する。まず、子どもの過ごし方を尋ねた以下の 7 項目が同質のものであるかを確認するために主成分分析（プロマックス回転）にかけた。

表 4-2 子どもと過ごす機会の多寡の因子分析

	機会共有 第1因子	
a 子どもとよく会話をする	0.63	
b 子どもとよく一緒にご飯を食べる	0.51	
c 子どもとよく遊ぶ	0.74	
d 子どもとよく一緒に勉強をする	0.54	
e 子どもとよく一緒にテレビを見る	0.51	
f 子どもとよく買い物に行く	0.64	
g 子どもとよくレジャーや博物館等に出かける	0.66	

固有値が 1 以上となったのが第 1 因子までであった。全て子どもの過ごし方を問う項目であったので「機会共有」と命名した。

よって仮説 I・II の検証に独立変数として使用する機会共有意識変数は、「子どもとよく会話をする」「子どもとよく一緒にご飯を食べる」「子どもとよく遊ぶ」「子どもとよく一緒に勉強をする」「子どもとよく一緒にテレビを見る」「子どもとよく買い物に行く」「子どもとよくレジャーや博物館等に出かける」の 7 項目を使用し、合成変数を作成することとした。得点の設定は、それぞれ「あてはまる」に 3 点、「どちらかどまらない」と「あてはまらない」に 2 点、「どちらかどまらない」と「あてはまらない」に 1 点、「あてはまらない」に 0 点を与え、7 項目の得点を加算した。クロンバックの α 係数を算出したところ、0.80 であった。合成後のレンジは 0~21、平均値は 14.73 となった。

4. 4 子どもとの機会共有意識と保護者の属性との関連

本節では、前項で作成した機会共有意識と保護者の属性との関連をみていく。

表4-3は、性別、配偶者との同居の有無、仕事の有無を独立変数、機会共有意識を従属変数としてt検定を行った結果である。

そして、表4-4は、保護者の年齢階級、子どもの人数を独立変数、機会共有意識を従属変数として、分散分析およびTukeyのHSD法を用いた多重比較を行った結果である。

表4-3 機会共有意識とのt検定結果

		N	平均値	t 値	p 値
性別	男	35	14.03	-1.13	0.2600
	女	721	14.75		
配偶者との同居	同居している	676	14.77	0.87	0.3855
	同居していない	83	14.40		
仕事の有無	有	472	14.36	-3.45	0.0006 ***
	無	281	15.32		
		*	p<0.05	**	p<0.01
				***	p<0.001

性別との関連では、平均値だけをみれば、男性と比べて女性のほうが子どもと過ごす機会が多いと感じている傾向がうかがえたが、統計的な有意差はみられなかった。

配偶者との同居の有無との関連については、配偶者と同居していない保護者と比べて同居している保護者のほうが子どもと過ごす機会が多いと感じている傾向がうかがえたが、統計的な有意差はみられなかった。

仕事の有無との関連では、0.1%水準で統計的な有意差がみられ、働いている保護者と比べて働いていない保護者のほうが子どもとの機会共有意識が高いという結果が出た。

表4-4 機会共有意識との分散分析結果

独立変数	N	平均	標準偏差	F値	p 値
年齢階級	20代	14	15.86	9.58	0.0001
	30代	324	15.48		
	40代	391	14.15		
	50代以上	26	13.31		
子どもの人数	1人	135	15.56	5.51	0.0010
	2人	431	14.80		
	3人	153	14.14		
	4人以上	35	13.26		

* p<0.001

年齢階級との関連では、平均値だけをみれば、年代が低い保護者ほど子どもとの機会共有意識を高く感じている傾向がうかがえたが、多重比較をおこなった結果、30代と40代・50代との間においてのみ統計的な有意差があることがわかった。

子どもの人数との関連では、子どもが1人いる保護者と3人・4人以上いる保護者との間で、統計的な有意差があることがわかった。このことから子どもが1人の保護者に比べると、子どもが3人以上いる保護者は機会共有意識が低いことがわかった。

以上のことから、子どもとの機会共有意識については、働いていない保護者よりも働いている保護者のほうが、30代よりも40代・50代の保護者のほうが、そして子どもがひとりの保護者よりも3人以上いる保護者のほうが、子どもと一緒に一緒にいられないを感じていることがわかった。

仕事の有無との関連では、働いていない保護者のほうが機会共有意識が高いことがわかったため、次に、保護者の仕事の有無と、本章の3節1項でみた子どもと過ごす機会の多寡とでクロス集計を行い、どの項目が仕事の有無と関連しているのかをみた。子どもと過ごす機会項目の「あてはまる」、「どちらかというとあてはまる」を「あてはまる」に、「どちらかというとあてはまらない」、「あてはまらない」を「あてはまらない」に統合し、fisherの正確検定をおこなった。

表4-5 保護者の仕事の有無と子どもと過ごす機会の多寡

		あ て は ま る	あ て は ま ら な い	計	p値
a 子どもとよく会話をする	仕事なし	94.0	6.1	100.0	281人
	仕事あり	88.0	12.1	100.0	473人
b 子どもとよく一緒にご飯を食べる	仕事なし	95.7	4.3	100.0	281人
	仕事あり	94.1	5.9	100.0	473人
c 子どもとよく遊ぶ	仕事なし	60.9	39.2	100.0	281人
	仕事あり	52.7	47.3	100.0	474人
d 子どもとよく一緒に勉強をする	仕事なし	73.0	27.1	100.0	281人
	仕事あり	55.1	44.9	100.0	474人
e 子どもとよく一緒にテレビを見る	仕事なし	80.4	19.6	100.0	281人
	仕事あり	78.7	21.3	100.0	474人
f 子どもとよく買い物に行く	仕事なし	81.9	18.2	100.0	281人
	仕事あり	76.2	23.8	100.0	474人
g 子どもとよくレジャーや博物館等に出かける	仕事なし	75.1	24.9	100.0	281人
	仕事あり	69.6	30.4	100.0	474人
* p<0.05 ** p<0.01 *** p<0.001					

正確検定の結果、「c 子どもとよく遊ぶ」で5%水準の、「a 子どもとよく会話をする」で1%水準の、「d 子どもとよく一緒に勉強をする」で0.1%水準の有意差がみられた。

このことから、働いている保護者は働いていない保護者よりも子どもとの「会話」、「勉強」、「遊び」の機会を少なく感じているということがわかった。

次に、仕事の時間が長いほど子どもと過ごす機会が少なく感じるのかを検証するために、保護者の一週間の就業時間と、子どもと過ごす機会項目とのクロス集計を行った。

表4-6をみると、統計的な有意差がみられたのは「a 子どもとよく会話をする」「b 子どもとよく一緒にご飯を食べる」「d 子どもとよく一緒に勉強をする」の3項目であった。

「a 子どもとよく会話をする」では1%水準、「b 子どもとよく一緒にご飯を食べる」と「c 子どもとよく一緒に勉強をする」では0.1%水準で有意差がみられ、いずれの項目においても、保護者の就業時間が長くなるほど子どもと過ごす機会を少なく感じる傾向がみられた。

また、cramer'sV係数をみると、最も就業時間との関連が強かつたのが「b 子どもとよく一緒にご飯を食べる」であり、この項目では「20時間未満」から「40時間以上60時間未満」で働いている保護者では90%以上が「あてはまる」と回答していたのに対し、「60時間以上」働いている保護者は約60%となっており、60時間未満で働いている保護者よりも機会共有意識が低い人が著しく多かった。

そのさい、「子どもの年齢」は、「小学2年生」は8才、「中学2年生」は14才と仮定し、「保護者の年齢」は、各年齢階級の中央値を年齢に代替し、分析をおこなった。

表4-8をみると、調整済みR²は0.14（p<0.0001）となり「子どもの年齢」が0.1%水準で有意となった。このことから子どもの年齢が低いほど機会共有意識が高まるといえる。つまり、子どもとの機会共有意識に影響を与えてているのは子どもの年齢であり、表4-4の保護者の年齢階級で有意となったのは保護者の年齢ではなく子どもの年齢の影響によるものであったと考えられる。

4.5 子どもに対する把握・承認意識

4.5.1 子どもに対する意識

表4-9 子どもに対する意識

単位(%)

	あてはまる	どちらかどまると あてはまる	どちらかどまらない あてはまらない	あてはまらない	あてはまる	あてはまらない	計
a 子どもの得意な科目を把握している	53.5	39.8	5.9	0.8	93.3	6.7	100.0 761人
b 子どもの苦手な科目を把握している	56.0	36.8	6.6	0.7	92.8	7.2	100.0 761人
c 子どもの友達の名前を知っている	56.8	37.1	5.0	1.2	93.8	6.2	100.0 761人
d 子どもが友達とどのように過ごしているか把握している	27.9	54.6	16.2	1.3	82.5	17.5	100.0 760人
e 子どもの好きな食べ物を知っている	75.7	23.3	1.1	0.0	99.0	1.1	100.0 761人
f 子どもの嫌いな食べ物を知っている	75.7	22.3	1.8	0.1	98.0	2.0	100.0 761人
g 子どもの好きな遊びを知っている	61.1	34.0	4.7	0.1	95.1	4.9	100.0 759人
h 子どもが落ち込んでいるときなどの感情に気づける	40.9	49.8	8.7	0.7	90.7	9.3	100.0 761人
i 子どもはよく親の言うことを聞いてくれる	16.3	52.2	26.4	5.1	68.5	31.5	100.0 759人
j 子どもは自らよくお手伝いをしてくれる	9.5	36.9	37.8	15.8	46.4	53.6	100.0 759人
k 子どもからよく感謝される	7.8	34.1	43.2	14.9	41.9	58.1	100.0 757人

表4-9をみると、子どもに対する意識のなかで「e 子どもの好きな食べ物を把握している」と「f 子どもの嫌いな食べ物を把握している」は、どちらも「あてはまる」という回答が75.7%と最も多かった。また、「i 子どもはよく親の言うことを聞いてくれる」、「j 子どもは自らよくお手伝いをしてくれる」、「k 子どもからよく感謝される」の3項目は、他の項目と比べて「あてはまる」という回答が少ない傾向がみられた。このことから、保護者は子どものことを比較的よく把握しているが、子どもから保護者に対しての肯定意識はあまり強くないと感じている傾向があることが分かった。

4.5.2 子どもに対する意識項目の因子分析と各因子を用いた合成尺度の作成

今回の調査では、「a 子どもの得意な科目を把握している」「b 子どもの苦手な科目を把握している」「c 子どもの友達の名前を知っている」「d 子どもが友達とどのように過ごしているか把握している」「e 子どもの好きな食べ物を知っている」「f 子どもの嫌いな食べ物を知っている」「g 子どもの好きな遊びを知っている」「h 子どもが落ち込んでいるときなどの感情に気づける」の8項目を、子どものことをどの程度把握しているかを測定する項目として、「i 子どもはよく親の言うことを聞いてくれる」「j 子どもは自らよくお手伝

いをしてくれる」「k 子どもからよく感謝される」の 3 項目を、子どもからの肯定意識をどの程度感じているかを測定する項目として想定し、質問紙を作成した。

この分類の妥当性をみるために上記の 11 項目を観測変数として主成分分析（プロマックス回転）にかけた。

表 4－10 子どもに対する意識項目の因子分析

		把握	承認
		第1因子	第2因子
把握- a	子どもの得意な科目を把握している	0.67 *	-0.07
把握- b	子どもの苦手な科目を把握している	0.70 *	-0.09
把握- c	子どもの友達の名前を知っている	0.61 *	0.12
把握- d	子どもが友達とどのように過ごしているか把握している	0.49 *	0.18
把握- e	子どもの好きな食べ物を知っている	0.81 *	-0.04
把握- f	子どもの嫌いな食べ物を知っている	0.79 *	-0.05
把握- g	子どもの好きな遊びを知っている	0.65 *	0.06
把握- h	子どもが落ち込んでいるときなどの感情に気づける	0.40 *	0.28
承認- i	子どもはよく親の言うことを聞いてくれる	0.01	0.65 *
承認- j	子どもは自らよくお手伝いをしてくれる	-0.02	0.72 *
承認- k	子どもからよく感謝される	0.01	0.72 *
因子間相関			-0.21

因子分析の結果、当初の想定通りの結果が得られたため、第 1 因子を「把握」意識、第 2 因子を「承認」意識と命名した。

なお、質問項目にある子どもとは、複数いる場合には、アンケートを持ち帰った子どもについて回答するように説明してある。

以上の結果から仮説 I・III で従属変数として使用する把握意識変数は、「a 子どもの得意な科目を把握している」「b 子どもの苦手な科目を把握している」「c 子どもの友達の名前を知っている」「d 子どもが友達とどのように過ごしているか把握している」「e 子どもの好きな食べ物を知っている」「f 子どもの嫌いな食べ物を知っている」「g 子どもの好きな遊びを知っている」「h 子どもが落ち込んでいるときなどの感情に気づける」の 8 項目を使用し合成変数を作成することとした。得点の設定は、それぞれ「あてはまる」に 3 点、「どちらかというとあてはまる」に 2 点、「どちらかというとあてはまらない」に 1 点、「あてはまらない」に 0 点を与え、8 項目の得点を加算した。クロンバッックの α 係数を算出したところ 0.85 となったため全ての項目を使用した。合成後のレンジは 0~24、平均値は 19.90 となった。

また、仮説 II で従属変数として使用する承認意識変数は、「i 子どもはよく親の言うことを聞いてくれる」「j 子どもは自らよくお手伝いをしてくれる」「k 子どもからよく感謝される」の 3 項目を使用し合成変数を作成した。得点の設定は、それぞれ「あてはまる」に 3 点、「どちらかというとあてはまる」に 2 点、「どちらかというとあてはまらない」に 1 点、「あてはまらない」に 0 点を与えた。クロンバッックの α 係数を算出したところ 0.75 となったため全ての項目を使用した。合成変数後のレンジは 0~9、平均値は 5.05 となった。

4. 6 子どもに対する把握意識・承認意識と保護者の属性との関連

4. 6. 1 把握意識と保護者の属性との関連

ここでは、前節で作成した把握意識と保護者の属性との関連をみていく。

表4-11では、性別、配偶者との同居の有無、仕事の有無を独立変数、把握意識を従属変数としてt検定を行った。

そして、表4-12では、年齢階級、子どもの人数を独立変数、把握意識を従属変数として、分散分析を行った。

表4-11 把握意識とのt検定結果

		N	平均値	t値	p値
性別	男	35	17.06	-3.88	0.0004 ***
	女	720	20.02		
配偶者との同居	同居している	675	19.99	2.26	0.0243 *
	同居していない	83	19.11		
仕事の有無	有	472	19.57	3.29	0.0011 **
	無	280	20.38		

* p<0.05 ** p<0.01 *** p<0.001

性別との関連では、0.1%水準で有意差がみられ、男性と比べて女性のほうが子どもに対する把握意識が高いという結果が出た。

配偶者との同居の有無との関連については、5%水準で有意差がみられ、配偶者と同居していない保護者と比べると、同居している保護者のほうが子どもに対する把握意識が高いという結果が出た。

仕事の有無との関連では、1%水準で有意差がみられ、働いている保護者と比べて働いていない保護者のほうが子どもに対する把握意識が高いという結果が出た。

表4-12 把握意識との分散分析結果

独立変数		N	平均	標準偏差	F値	p値
年齢階級	20代	14	18.21	3.89	1.85	0.136
	30代	324	20.10	3.19		
	40代	390	19.78	3.49		
	50代以上	26	19.42	3.53		
子どもの人数	1人	135	20.27	3.20	2.31	0.0746
	2人	431	19.94	3.33		
	3人	152	19.63	3.32		
	4人以上	35	18.71	4.49		

年齢階級との関連では、平均値だけをみれば、30代が最も把握意識が高かったが、統計的な有意差はみられなかった。

子どもの人数との関連では、子どもの人数が少ない保護者ほど把握意識が高い傾向があるがえたが、統計的な有意差はみられなかった。

以上のことから、子どもに対する把握意識は性別では女性、配偶者との同別居では同居している保護者、仕事の有無では働いていない保護者のほうが高いことがわかった。

働いている保護者は働いていない保護者よりも把握意識が低いことがわかったので、次に就業時間が長いほど把握意識が低くなるのかを見ていく（表4-13）。

表4-13 子どもに対する把握意識と就業時間の相関分析

	N	平均	標準偏差	相関係数	p値
把握意識	758	19.90	3.38	-0.11 *	0.024
就業時間	468	29.47	15.07		

* p<0.05

保護者の就業時間の長さと把握意識との関連を見るために、相関分析を行ったところ、相関係数は-0.11となり、弱い負の相関がみられた。よって就業時間が長くなるほど把握

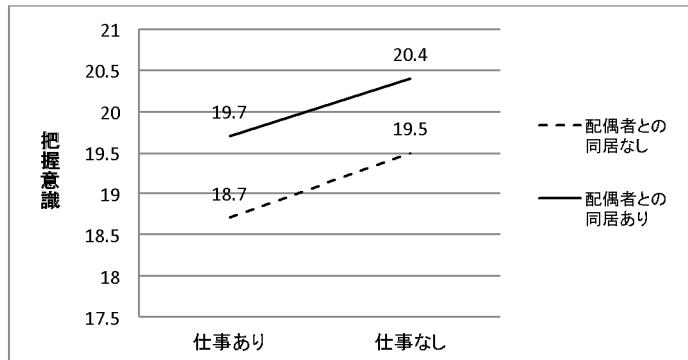
意識が低くなる傾向があるが、就業時間の長さは把握意識にそれほど影響を与えていないということがわかった。

また、表4-11では、配偶者と同居していない保護者のほうが把握意識が低かったが、こうした結果は、仕事の有無の影響を受けていることが考えられる。というのも、「配偶者と同居していない」という場合には、3章4節でも述べたように、配偶者が単身赴任をしているケースも考えられるが、離別・死別という可能性も考えられる。配偶者が死別している場合には保護者はフルタイムで働くことが多い。これを踏まえて考えてみると、配偶者との同居が直接的に把握意識に影響を与えていているわけではなく、就業状態こそが把握意識に影響を与えている可能性が考えられる。そこで次に、配偶者との同居の有無別・仕事の有無別に、把握意識を従属変数とした二元配置分散分析をおこなった（表4-14）。

表4-14 配偶者との同居の有無別・仕事の有無別の把握意識の比較

独立変数	D F	平方和	平均平方和	F 値	p値
配偶者との同居の有無	1	64.6	64.6	5.74	0.0168 *
仕事の有無	1	93.1	93.1	8.27	0.0041 **
配偶者との同居の有無×仕事の有無	1	0.0	0.0	0.00	0.9675

* p<0.05 ** p <0.01



結果、配偶者との同居の有無および仕事の有無における主効果がみられたが、交互作用はみられなかった。したがって、配偶者と同居している場合も同居していない場合も、仕事をしていない人よりも仕事をしている人のほうが把握意識は低いが、配偶者と同居している場合よりも配偶者と同居していない場合のほうがさらに把握意識は低いことがわかった。

4. 6. 2 承認意識と保護者の属性との関連

ここでは、承認意識と保護者の属性との関連をみていく。

表4-15では、性別、配偶者との同居の有無、仕事の有無を独立変数、承認意識を従属変数としてt検定を行った。

そして、表4-16では、年齢階級、子どもの人数を独立変数、承認意識を従属変数として、分散分析を行った。

表4-15 承認意識とのt検定結果

		N	平均値	t 値	p 値
性別	男	34	4.82	-0.63	0.5292
	女	718	5.04		
配偶者との同居	同居している	672	5.07	0.98	0.326
	同居していない	83	4.84		
仕事の有無	有	470	4.96	-1.36	0.1746
	無	279	5.16		

性別との関連では、平均値だけをみれば、男性と比べて女性のほうが子どもに対する承認意識が高いと感じる傾向がうかがえたが、統計的な有意差はみられなかった。

配偶者との同居との関連については、配偶者と同居していない保護者と比べて、同居している保護者のほうが子どもに対する承認意識が高い傾向がうかがえたが、統計的な有意差はみられなかった。

仕事の有無との関連は、働いている保護者と比べて、働いていない保護者のほうが子どもに対する承認意識が高い傾向が伺えたが、統計的な有意差はみられなかった。

表 4-16 承認意識との分散分析結果

独立変数	N	平均	標準偏差	F 値	p 値
年齢階級	20代	14	4.86	2.14	0.0618
	30代	322	5.24	1.91	
	40代	389	4.91	2.08	
	50代以上	26	4.46	1.45	
子どもの人数	1人	132	5.06	2.06	0.7349
	2人	431	4.99	1.98	
	3人	153	5.19	1.90	
	4人以上	34	4.91	2.35	

年齢階級との関連では、平均値だけをみれば、30代が最も承認意識が高かったが、統計的な有意差はみられなかった。

子どもの人数との関連では、平均値だけをみれば、子どもが3人いる保護者が最も承認意識が高かったが、統計的な有意差はみられなかった。

4.7 機会共有意識と把握意識：仮説Iの検証

本節では、仮説I「子どもと過ごす機会が多いと感じている保護者のほうが子どもに対する把握意識が高い」を検証するために、4.3で作成した機会共有意識変数と把握意識変数との相関分析を行った（表4-17）。

表 4-17 機会共有意識と把握意識の相関分析

	N	平均	標準偏差	相関係数	p 値
機会共有	759	14.73	3.72	0.36***	<0.0001
把握意識	758	19.89	3.38		
*** p<0.001					

相関分析の結果、機会共有意識と把握意識の相関（n=756）は、r=0.36となり、0.1%水準で有意な弱い正の相関がみられた。よって、子どもと過ごす機会が多いと感じる保護者ほど子どもに対する把握意識が高いといえる。

子どもと過ごす機会が増えると把握意識が高まることがわかったので、次に機会共有意識のうち把握意識を高めている項目を検証する。子どもと過ごす機会項目を独立変数、把握意識変数を従属変数として重回帰分析にかけた（n=756）。なお機会共有意識変数を構成する「子どもとよく遊ぶ」と「子どもとよくレジャーや博物館等に出かける」はそれぞれ「子どもとよく会話をする」「子どもとよく買い物に行く」との相関が高かったため分析に組み込まなかった。

表 4-18 子どもと過ごす機会項目と子どもに対する把握意識の重回帰分析

	β	p値
a 子どもとよく会話をする	0.25	<0.0001 ***
b 子どもとよく一緒にご飯を食べる	0.10	0.0068 **
d 子どもとよく一緒に勉強をする	0.05	0.8959
e 子どもとよく一緒にテレビを見る	0.08	0.0428 *
f 子どもとよく買い物に行く	0.12	0.0015 **
		p <0.0001
		調整済 R ² 0.16

表 4-18 をみると、調整済み R² は 0.16(p <0.0001)となつており、「a 子どもとよく会話をする」で 0.1% 水準、「b 子どもとよく一緒にご飯を食べる」と「f 子どもとよく買い物に行く」で 1% 水準、「e 子どもとよく一緒にテレビを見る」で 5% 水準の有意な結果がえられた。

会話と食事は日常的に繰り返されるものであり、それだけ普段の子どもの様子を把握しやすいといえる。子どもと一緒に買い物をすることで把握意識が高まるのは、「子どもの欲しいものを買いに行く」、「買い物の途中で子どもに欲しいものをねだられる」など、子どもの好みを知る機会が発生しやすいことが一因と考えられる。

以上の結果から、仮説 I 「子どもと過ごす機会が多いと感じている保護者のほうが子どもに対する把握意識が高い」は、相関分析の結果、機会共有意識変数と把握意識変数で正の相関がみられ、検証された。特に子どもとの会話、食事、買い物といった行動は子どもに対する把握意識を高めることがわかつた。

4. 8 機会共有意識と承認意識：仮説 II の検証

本節では仮説 II 「子どもと過ごす機会が多いと感じている保護者のほうが子どもに対する承認意識が高い」を検証するために、機会共有意識変数と承認意識変数の相関分析を行つた。

表 4-19 機会共有意識と承認意識の相関分析

	N	平均	標準偏差	相関係数	p 値
承認意識	755	5.05	2.01	0.44 ***	<0.0001
機会共有意識	759	14.73	3.72		
					*** p<0.001

表 4-19 をみると、相関係数は 0.44 となつており、0.1% 水準で有意な結果がえられた。

親子で過ごす機会が多ければ子どもに対する承認意識が高まるということがわかつたので、次に、どの承認意識項目が機会共有意識との関係が高いのかをみるために、機会共有意識変数と、承認意識変数を構成する「i 子どもはよく親の言うことをきいてくれる」、「j 子どもは自らよくお手伝いをしてくれる」の 2 項目を重回帰分析にかけた(n =756)。

なお、承認意識項目を構成する「k 子どもからよく感謝される」は「j 子どもは自らよくお手伝いをしてくれる」との相関が高かつたため分析に組み込まなかつた。

表 4-20 子どもに対する承認項目と子どもの機会共有意識の重回帰分析

	β	p値
i 子どもはよく親の言うことをきいてくれる	5.06	<0.0001 ***
j 子どもは自らよくお手伝いをしてくれる	6.96	<0.0001 ***
		p <0.001
		調整済 R ² 0.15

表 4-20 をみると、調整済み R^2 は 0.15 ($p<0.001$) となっており、「i 子どもはよく親の言うことを聞いてくれる」「j 子どもは自らよくお手伝いをしてくれる」のどちらも 0.1% 水準で有意な結果がえられた。

以上のことから子どもとの機会共有意識が高いほど子どもに対する承認意識が高まるといえる。よって仮説Ⅱは検証された。

中井孝章（2007）によると、子どもが求める共同体的・他者志向的な承認のうち、その子の自ら伸びていこうとする力（能力や個性）を伸ばす効果が最も高いのが家族からの承認だとされる。また、小島弥生・太田恵子・菅原健介（2003）によると承認欲求には他者からのプラスの評価を獲得する賞賛獲得欲求とマイナスの評価を回避する拒否回避欲求があり、これを満たすために行動にうつされるとされる。

これらの知見と今回の調査結果を重ねてみると、保護者の子どもに対する承認意識が高ければ、子どもの承認欲求を満たしやすく、よりよい親子関係の構築ならびに子どもの成長が期待できるといえるように思う。

4. 9 子どもの学齢と把握意識：仮説Ⅲの検証

本節では、仮説Ⅲ「小学生の保護者よりも中学生の保護者のほうが子どもに対する把握意識が低い」を検証するために、独立変数を子どもの学齢とし、従属変数を把握意識変数として得点の平均値を比較した。

表 4-21 子どもの学齢と把握意識

	把握意識 平均値	N	t値	p値
小学生	19.9	525	0.39	0.6993
中学生	19.8	230		

表 4-21 をみると統計的な有意差はみられず、「小学生の保護者よりも中学生の保護者のほうが子どもに対する把握意識が低い」という仮説は検証されなかった。

次に、把握意識を構成する項目を従属変数として、子どもの学齢別に平均値を比較した。

表 4-22 子どもの学齢と把握意識項目

把握意識変数	把握意識 平均		N	t値	p値
	小学生	中学生			
a 子どもの得意な科目を把握している	2.4	527	-1.71	0.0876	
	2.5	231			
b 子どもの苦手な科目を把握している	2.4	527	-2.84	0.0046 **	
	2.6	231			
c 子どもの友達の名前を知っている	2.5	526	2.52	0.0123 *	
	2.4	231			
d 子どもが友達とどのように過ごしているか把握している	2.5	527	-1.32	0.1878	
	2.4	231			
e 子どもの好きな食べ物を知っている	2.8	527	1.12	0.2648	
	2.7	231			
f 子どもの嫌いな食べ物を知っている	2.7	527	0.81	0.4158	
	2.7	231			
g 子どもの好きな遊びを知っている	2.6	526	1.94	0.0526	
	2.5	230			
h 子どもが落ち込んでいるときなどの感情に気づける	2.3	527	1.73	0.0842	
	2.2	230			

* p<0.05 ** p<0.01

表4-22をみると、「b 子どもの苦手な科目を把握している」で1%水準、「c 子どもの友達の名前を知っている」で5%水準の有意差がみられた。ただし、「b 子どもの苦手な科目を把握している」では中学生の保護者のほうが苦手科目に対する把握意識が高いということになる。

結果、中学生の保護者と比べて小学生の保護者のほうが、把握意識が高いのは「c 子どもの友達の名前を知っている」のみで、それ以外の項目では仮説IIIは検証されなかった。

仮説III「子どもの学齢が高い保護者のほうが子どものことを把握意識が低い」は、「子どもの友だちの名前を知っている」という把握意識項目しか検証されなかった。

4. 10 子どもの学齢と承認意識：仮説IVの検証

本節では仮説IV「小学生の保護者よりも中学生の保護者のほうが子どもに対する承認意識が低い」を検証するために、保護者の子どもの学齢を独立変数とし、承認意識変数を従属変数として得点の平均値を比較した。

表4-23 子どもの学齢と承認意識

	承認意識 平均値	N	t 値	p 値
小学生	5.3	523		
中学生	4.4	229	5.67	<0.0001 ***

*** p<0.001

表4-23をみると、0.1%水準で有意差がみられ、中学生の保護者と比べて小学生の保護者のほうが子どもに対する承認意識が高いという結果が出た。以上のことから、仮説IVは検証された。

4. 11 まとめ

これまでの結果をまとめると、機会共有意識が高い保護者ほど子どもに対する把握意識・承認意識が高いことがわかった。そして保護者の子どもと過ごす機会共有意識を低下させる原因としては、保護者が働いている、子どもの人数が多いということが関連していることがわかった。

また、子どもの学齢との関連では、中学生の保護者と比べて小学生の保護者のほうが機会共有意識・承認意識が高い傾向にあるが、把握意識との関連はみられなかった。

仕事の有無との関連では、働いている保護者と比べて働いていない保護者のほうが、把握意識が高い傾向がうかがえた。

配偶者との同居については、同居していない保護者と比べて同居している保護者のほうが、把握意識が高い傾向がうかがえた。

以上のことから、保護者の仕事の有無、配偶者との同居は把握意識との関連が強く、承認意識については、子どもの学齢が小学生の保護者のほうが高い傾向がみられた。

内閣府男女共同参画局によると、共働きの夫婦は年々増加しており、今後子どもと過ごす時間が減少し、子どもに対する把握意識が低い保護者が増えていくとみられる。中

井孝章（2007）によれば、他者からの承認は、子どもの自尊心を高め、成長・発達のきっかけになる。特に家族からの承認は、子どもの自己存在の証明に繋がり、良好な親子関係を築くためには、子どもに対する把握意識・承認意識が欠かせない。これらの意識を高めるには、子どもと過ごす機会を増やすことが重要になる。保護者の共働きは、子どもと過ごす時間の減少に繋がるが、子どもとの時間を十分にとれなくとも、肝心なのはいかに子どもとの時間の質を高め、密度を深くすることができるかであろう。

【参考文献・URL】

- 青木多寿子・竹嶋飛鳥・戸田真弓・谷口弘一, 2007, 「両親の養育態度、生活体験が小学生の社会的スキル、生活充実感に及ぼす影響」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第一部 56号 : 21-28.
- 藤村美子・秋葉英則, 1997, 「親子関係認知と承認欲求、達成動機との関わりについて」『大阪教育大学紀要』第IV部門 46(2) : 167-179.
- 小島弥生・太田恵子・菅原健介, 2003「賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度の試み」, 『性格心理学研究』日本性格心理学会 11(2) : 86 - 98.
- 森下正康, 1996, 「子どもの社会的行動の形成に関する研究」風間書房, 1- 14.
- 内閣府男女共同参画局編, 2013「第一部 男女共同参画社会の形成の状況」『男女共同参画白書』
(http://www.gender.go.jp/about_danjo/whitepaper/h25/zentai/html/zuhyo/zuhyo01-02-19.html)
アクセス日 2013年11月6日)
- 中井孝章, 2007, 「子どもの自己承認欲求と親からの期待と承認の関連性」『生活科学研究誌』Vol6 : 113-137
- 鈴木公啓・本田周二, 2007, 「賞賛獲得欲求と拒否回避欲求はどのくらい安定しているか?」, 『日本パーソナリティ心理学会大会発表論文集』16号 : 160-161.

第5章 保護者の外向性・子育て環境が子育て不安に与える影響

B1C114 和田直也

5. 1 問題意識と仮説

5. 1. 1 問題意識

筆者は保護者の外向的な性格や子育て環境が子育てをするうえで感じる不安にどのような影響を与えるか興味をもった。また、保護者のポジティブさや保護者同士の関わり、子どもの人数などによって子育てに対する不安の内容も変わらるのだろうか。そして、子育てに対する不安の発生は防ぐことは出来ないが、不安を減らすことはできるのではないかと考えた。

中村真弓（2008）によると、母親の約6割は子どもがわざわざしてイララしたり、毎日同じことの繰り返しだと感じている。この子どもがわざわざ感じたりすることは、子どもが幼稚園にいる間は、子どもと離れられるものの、家事を片付けて、自分のことに取りかかったと思ったら、子どもが降園することによって自分の自由な時間が少ないとや、子どもの言葉の発達と、子どもの発達の遅れが気になっていることが影響しているとされている。

また、保護者にとって子育てをする環境は重要であり、その環境の要因の1つとして保護者の社会関係がある。保護者の社会関係としては、家族や親族、幼稚園や学校で知り合った保護者、近隣の住民などが考えられる。幼稚園や学校で知り合った保護者同士での会話の内容は、幼稚園や学校の話や子育ての話が中心で心配事や悩み事を聞き合うという保護者同士のやりとりが予想される。

そこで、本章では、子育てをする保護者にとって家族や親族、同じ子育てをする保護者と関わることで不安を緩和させる効果があるのかということと、子育てをする保護者自身の性格と不安の関連をテーマとし、次項に掲げた5つの仮説の検証を行った。

5. 1. 2 仮説

- I 外向的である保護者は外向的ではない保護者よりも子育て不安が低い。
- II 保護者同士のやりとりが多い保護者はやりとりが少ない保護者よりも子育て不安が低い。
- III 子育ての話ができる友人の人数が多いほど、子育て不安が低い。
- IV 自分の／配偶者の母親と同居している保護者は、同居していない保護者より子育て不安が低い。
- V 子どもの人数が多いほど、子育て不安が低い。

5. 2 子育てに対する不安

5. 2. 1 子育てを行っていて感じる不安

子育ての中でどのような不安をどの程度感じているかを調べるために、表5-1にある

5. 2. 3 「難解性」「ストレス」変数の合成

表 5-2 の主成分分析をした結果を利用し、第 1 因子を構成する 7 項目、それぞれに、「あてはまる」という回答に 3 点、「どちらか」というとあてはまる」に 2 点、「どちらか」というとあてはまらない」に 1 点、「あてはまらない」に 0 点を与える、7 項目のスコアを加算して合成変数「難解性」とした。同じく、「子どもを育てることが負担である」「自分ひとりで子どもを育てているのだという圧迫感を感じてしまう」「子どもを育てるために我慢ばかりしていると思う」「毎日、毎日、同じことの繰り返ししかしていないと思う」という第 2 因子を構成する 4 項目の質問ごとのスコアを加算して合成変数「ストレス」とした。「難解性」のレンジは 0 ~ 21、平均値は 9.84 であり、クロンバックの α は 0.91 であった。一方、「ストレス」のレンジは 0 ~ 12、平均値は 3.47 であり、クロンバックの α は 0.78 だった。

5. 3 子育て不安の原因

5. 3. 1 子どもの学齢と子育て不安の原因

ここでは、子どもの学齢が子育て不安の原因とどう関わっているのかをみるために「子どもの学齢」と「子育ての不安の原因」とをクロス集計し、 χ^2 検定を行った（表 5-3）。

なお、子育て不安の原因については表 5-3 の a ~ h のそれぞれの項目についてどの程度不安を感じているか、「不安」「どちらかといえば不安」「どちらかといえば不安でない」「不安でない」の 4 件法で回答を求めた。

表 5-3 子どもの学齢と子育て不安の原因

単位(%)

		どちらか といえ ば	どちらか でない いえ ば	どちらか でない いえ ば	不 安 で な い	計	χ^2 値	p 値
a しつけ	小学生	15.1	41.4	33.0	10.5	100.0	522人	4.5665 0.2064
	中学生	12.2	37.8	34.8	15.2	100.0	230人	
b 学力・成績	小学生	17.6	38.9	32.6	10.9	100.0	524人	10.1389 0.0174 *
	中学生	24.2	39.8	22.5	13.4	100.0	231人	
c 進路・進学	小学生	17.4	39.0	32.9	10.7	100.0	523人	17.5841 0.0005 ***
	中学生	28.6	41.6	22.1	7.8	100.0	231人	
d 教育費	小学生	29.8	37.8	22.1	10.3	100.0	524人	3.9629 0.2655
	中学生	36.4	33.8	22.1	7.8	100.0	231人	
e 非行・交友関係	小学生	15.5	38.1	34.3	12.1	100.0	522人	15.7513 0.0013 **
	中学生	9.6	29.1	42.6	18.7	100.0	230人	
f 食事・栄養	小学生	6.9	24.5	42.5	26.2	100.0	523人	1.2005 0.7529
	中学生	6.9	21.2	42.9	29.0	100.0	231人	
g 健康	小学生	5.6	20.7	46.8	26.9	100.0	521人	0.5913 0.8984
	中学生	5.2	22.9	44.6	27.3	100.0	231人	
h 衣服・身だしなみ	小学生	2.5	11.1	48.7	37.7	100.0	522人	1.4359 0.6971
	中学生	2.2	13.0	51.1	33.8	100.0	231人	

* p<0.05 ** p<0.01 *** p<0.001

不安の原因として小学生の保護者の多くが不安を感じているのは、「d. 教育費」(29.8%)、その次に「b. 学力・成績」(17.6%)、さらに「c. 進路・進学」(17.4%) と続いている。一方、不安でない人が多いのは、「h. 衣服・身だしなみ」(37.7%)、「g. 健康」(26.9%)、「f. 食事・栄養」(26.2%) の順になっている。

次に、不安の原因として中学生の保護者の多くが不安を感じているのは、小学生の保護

者と同じ「d. 教育費」(36.4%)、その次に「c. 進路・進学」(28.6%)、それに「b. 学力・成績」(24.2%)が続く結果になった。一方、不安に思っていないことは、「h. 衣服・身だしなみ」(33.8%)であり、次に「f. 食事・栄養」(29.0%)、「g. 健康」(27.3%)となつた。

χ^2 検定の結果、保護者の不安の原因のうち「c. 進路・進学」は0.1%水準で、「b. 学力・成績」は5%、「e. 非行・交友関係」は1%水準で、統計的な有意差がみられ、小学生の子どもを育てている保護者は中学生の保護者と比べ「e. 非行・交友関係」で、中学生の子どもを育てている保護者は小学生の保護者に比べ「c. 進路・進学」「b. 学力・成績」でより不安を感じていることがわかつた。

5. 3. 2 「教育」「保健・健全性」因子の析出

表5-4は子育て不安の原因として考えられる8項目が共通に関わっている因子を析出するために主成分分析（プロマックス回転）にかけた結果である。

表5-4 子育て不安の原因の因子分析

	教育	保健・健全性	
		第1因子	第2因子
教育-	進路・進学	0.90 *	-0.05
教育-	学力・成績	0.89 *	-0.04
教育-	教育費	0.67 *	0.01
教育-	しつけ	0.47 *	0.31
保健・健全性-	健康	-0.06	0.87 *
保健・健全性-	食事・栄養	0.03	0.81 *
保健・健全性-	衣服・身だしなみ	0.01	0.77 *
保健・健全性-	非行・交友関係	0.40 *	0.43 *
因子間相関		0.41	

固有値が1以上となったのが第2因子までであった。第1因子は4項目で構成され、子どもの教育に関する不安であることから「教育」と命名した。第2因子は4項目で作成され、子どもの保健・健全性に関する不安であることから「保健・健全性」と命名した。

5. 3. 3 「教育」「保健・健全性」変数の合成

表5-4の主成分分析をした結果を利用し、第1因子を構成する4項目に対し、それぞれの項目ごとに、「不安」という回答に3点、「どちらかといえば不安」に2点、「どちらかといえば不安でない」に1点、「不安でない」に0点を与える、4つの項目ごとのスコアを加算して合成変数「教育」とした。同じく、「健康」「食事・栄養」「衣服・身だしなみ」「非行・交友関係」という第2因子を構成する4つの項目の回答にスコアを与え加算して合成変数「保健・健全性」とした。「教育」のレンジは0～12、平均値は6.86であり、クロンバックの α は0.77であった。一方、「保健・健全性」のレンジは0～12、平均値は4.45であり、クロンバックの α は0.77だった。

5. 4 子育てを行っていて感じる不安とその原因との関連

次に、5. 2. 3で作成した子育てに対する不安度にはどのようなことが関わっているかを調べるために、子育て不安の原因として考えられるもの8項目のスコア得点と「難解

性」「ストレス」のスコアとを用いて相関分析をした。

表 5-5 何が不安度の原因として影響があるのか

	N	相関係数	
		難解性	ストレス
a しつけ	759	0.71 ***	0.46 ***
b 学力・成績	762	0.44 ***	0.28 ***
c 進路・進学	761	0.39 ***	0.27 ***
d 教育費	762	0.28 ***	0.18 ***
e 非行・交友関係	759	0.38 ***	0.25 ***
f 食事・栄養	761	0.38 ***	0.28 ***
g 健康	759	0.35 ***	0.29 ***
h 衣服・身だしなみ	760	0.37 ***	0.30 ***

* p<0.05 ** p<0.01 *** p<0.001

表 5-5 は「a. しつけ」、「b. 学力・成績」、「c. 進路・進学」、「d. 教育費」、「e. 非行・交友関係」、「f. 食事・栄養」、「g. 健康」、「h. 衣服・身だしなみ」の 8 つの項目と「難解性」「ストレス」との相関係数を算出した結果である。「難解性」「ストレス」と 8 つの項目にはいずれも 0.1%未満の水準で有意な正の相関がみられた。「難解性」と「ストレス」どちらも「a. しつけ」においてとくに強い相関があり、不安の原因となっていることがわかった。

5. 5 保護者の外向性と子育てに対する不安（子育てを行っていて感じる不安・不安の原因）の関連：仮説 I の検証

ここでは、仮説 I 「外向的である保護者は外向的ではない保護者よりも子育て不安が低い」を検証するために、保護者の外向性と子育てに対する不安（子育てを行っていて感じる不安・不安の原因）との関連を見る。

5. 5. 1 「保護者の外向性」変数の合成

表 5-6 保護者の外向性の単純集計

単位(%)

保護者の外向性	どうあてはまる					あてはまらない	あてはまる	あてはまらない	計
	あてはまる	どちらかどまいる	どちらかどまい	どちらかどまう	どちらかどまう				
a 話し好きである	24.5	47.6	23.6	4.3	72.1	27.9	100.0	760人	
b なるべく人に会わないでいたいと思う	3.8	27.6	44.9	23.8	31.4	68.7	100.0	758人	
c 人と広く付き合うほうだ	13.8	36.0	38.5	11.7	49.8	50.2	100.0	759人	
d 陽気である	20.2	51.8	24.9	3.2	72.0	28.1	100.0	759人	
e 話題には事欠かないほうだ	9.9	38.2	39.7	12.3	48.1	52.0	100.0	759人	

表 5-6 は、保護者の外向性を測定する 5 項目について単純集計した結果である。「あてはまる」と「どちらかというとあてはまる」を合わせてみると、最も高かったのは、「a. 話し好きである」(72.1%) であり、次いで「d. 陽気である」(72.0%) であった。一方、「b. なるべく人に会わないでいたいと思う」はあてはまらない人が 68.7% で最も多かった。陽気な保護者と話し好きの保護者が多く、人に会いたくない保護者が少ないことがわかった。

「保護者の外向性」変数を作成するため、表5・6の、「a. 話し好きである」「c. 人と広く付き合うほうだ」「d. 陽気である」「e. 話題には事欠かないほうだ」という4項目には、「あてはまる」という回答に3点、「どちらかというとあてはまる」に2点、「どちらかというとあてはまらない」に1点、「あてはまらない」に0点を与え、「b. なるべく人に会わないでいたいと思う」は逆転項目なので、「あてはまる」に0点、「どちらかというとあてはまる」に1点、「どちらかというとあてはまらない」に2点、「あてはまらない」に3点を与え、5つの質問のスコアを加算して合成変数「保護者の外向性」とした。クロンバックの α を算出したところ、0.82であった。合成変数のレンジは0～15であり、平均値は8.67となった。

5. 5. 2 保護者の外向性と子育てを行っていて感じる不安

ここでは、「保護者の外向性」と「難解性」、「ストレス」との関連を見るためにそれぞれ単回帰分析を行った。

まず、「保護者の外向性」を独立変数、「難解性」を従属変数とする単回帰分析の結果は、「難解性=12.69+(-0.33)×保護者の外向性」($R^2=0.0429$ 、 $p=<.0001$)となった。

次に「保護者の外向性」を独立変数、「ストレス」を従属変数とする単回帰分析の結果は、「ストレス=5.30+(-0.21)×保護者の外向性」($R^2=0.0634$ 、 $p=<.0001$)だった。

この2つの単回帰分析の結果、「保護者の外向性」が1点上がると、「難解性」は0.33点、「ストレス」は0.21点下がり、「難解性」が「ストレス」より、0.12点多く下がることが示された。どちらも有意ではあるが、決定係数である R^2 が低いため、モデルのあてはまりは悪く、従属変数「難解性」では約4%、従属変数「ストレス」では約6%しか独立変数「保護者の外向性」によって説明することができず、モデルとしての有用性は低いと判断される。

5. 5. 3 保護者の外向性と子育て不安の原因

続いて、「保護者の外向性」が「教育」、「保健・健全性」という子育て不安の原因と関連があるかみるために、それぞれ単回帰分析をおこなった。

まず、「保護者の外向性」を独立変数、「教育」を従属変数とする単回帰分析の結果は、「教育=7.97+(-0.13)×保護者の外向性」($R^2=0.0205$ 、 $p=<.0001$)となった。

次に「保健・健全性」を従属変数とした単回帰分析の結果は、「保健・健全性=5.87+(-0.17)×保護者の外向性」($R^2=0.0402$ 、 $p=<.0001$)であった。

この2つの単回帰分析の結果、「保護者の外向性」が1点上がると、「教育」に対する不安は0.13点、「保健・健全性」に対する不安は0.17点下がり、「保健・健全性」が「教育」より、0.04点多く下がることが示された。しかし、どちらも有意であるものの、決定係数である R^2 が低いため、モデルのあてはまりは悪く、従属変数「教育」では約2%、従属変数「保健・健全性」では約4%しか独立変数「保護者の外向性」から説明することができないため、モデルとしての有用性は低いと判断される。

5. 5. 4 保護者の外向性と子育てに対する不安（子育てを行っていて感じる不安・不安の原因）のまとめ

結果、仮説Ⅰは検証された。「保護者の外向性」が上がれば、「難解性」「ストレス」「教育」「保健・健全性」の項目すべてが下がる結果がみられた。

5. 6 保護者同士のやりとりと子育て不安（子育てを行っていて感じる不安・不安の原因）の関係：仮説Ⅱの検証

本節では、仮説Ⅱ「保護者同士のやりとりが多い保護者ほど子育て不安が低い」を検証するために、保護者同士のやりとりと子育てに対する不安（子育てを行っていて感じる不安・不安の原因）との関連を見る。

5. 6. 1 「保護者同士のやりとり」変数の合成

表 5-7 保護者同士のやりとりの単純集計

単位(%)

保護者同士のやりとり	よくある	ときどきある	あまりない	まったくない	ある	ない	計
	よ く あ る	とき ど き あ る	あ ま り な い	ま つ た く な い			
a 子育てを手助けされること	15.8	38.9	32.4	12.9	54.7	45.3	100.0 759人
b 子育てに関する情報を教えてされること	31.4	51.9	13.1	3.7	83.3	16.8	100.0 758人
c 心配事や悩み事を聞いてもらうこと	32.0	47.6	16.1	4.4	79.6	20.5	100.0 759人
d 褒められることや励まされること	20.0	53.1	19.9	7.0	73.1	26.9	100.0 759人

表 5-7 は、保護者同士の具体的なやりとりの内容として考えられる 4 項目について単純集計した結果である。「よくある」と「ときどきある」を合わせてみると、最も多かったのは、「b. 子育てに関する情報を教えてされること」(83.3%) であり、次いで「c. 心配事や悩み事を聞いてもらうこと」(79.6%) であった。一方、「あまりない」「まったくない」を合わせてみると、「a. 子育てを手助けされること」が 45.3% で最も多かった。「b. 子育てに関する情報を教えてされること」や「c. 心配事や悩み事を聞いてもらうこと」が多いことから、保護者同士のやりとりでは、気軽にできる口頭でのやりとりが多いことがうかがえる。

以下、現在子育て中の保護者とのやりとりの程度の度合いを「保護者同士のやりとり」と呼ぶ。「保護者同士のやりとり」は、表 5-7 にある 4 つの項目のそれぞれの回答に対し、「よくある」に 3 点、「ときどきある」に 2 点、「あまりない」に 1 点、「まったくない」に 0 点というスコアを与え、その総和を求めて作成した。クロンバックの α を算出したところ、0.82 であった。合成変数のレンジは 0~12 であり、平均値は 7.62 となった。

5. 6. 2 保護者同士のやりとりと子育てを行っていて感じる不安

ここでは、「保護者同士のやりとり」と子育てを行っていて感じる不安との関連をみるために、「保護者同士のやりとり」と「難解性」「ストレス」変数とを単回帰分析した。

始めに、「保護者同士のやりとり」を独立変数、「難解性」を従属変数とする単回帰分析

の結果は、「難解性=9.80+0.003×保護者同士のやりとり」($R^2=0.0000$ 、 $p=0.9640$)となつた。統計的に有意ではないため、保護者同士のやりとりは「難解性」に関連がないことが示された。

次に、「保護者同士のやりとり」を独立変数、「ストレス」を従属変数とする単回帰分析の結果は、「ストレス=5.13+(-0.22)×保護者同士のやりとり」($R^2=0.0479$ 、 $p=<.0001$)となつた。これは、「保護者同士のやりとり」が1点上がることで、子育てを行っていて感じる不安の「ストレス」が0.22点下がることを示している。しかし、有意ではあるものの、モデルのあてはまりが悪く、決定係数である R^2 が0.0479と極めて低いため、従属変数「ストレス」のうち約5%しか独立変数「保護者同士のやりとり」では説明できず、モデルとしての有用性は低いと判断される。

5. 6. 3 保護者同士のやりとりと子育て不安の原因

保護者同士のやりとりと子育て不安の原因との関連を見るために、「保護者同士のやりとり」と「教育」「保健・健全性」変数とを単回帰分析した。

まず、「保護者同士のやりとり」を独立変数、「教育」を従属変数とする単回帰分析の結果は、「教育=6.83+0.001×保護者同士のやりとり」($R^2=0.0000$ 、 $p=0.9714$)となり、「保護者同士のやりとり」と「教育」は統計的に有意な関連がないといえる。

次に「保護者同士のやりとり」を独立変数、「保健・健全性」を従属変数とする単回帰分析の結果は、「保健・健全性=4.69+(-0.03)×保護者同士のやりとり」($R^2=0.0012$ 、 $p=0.3369$)となり、これもまた、「保護者同士のやりとり」と「保健・健全性」も統計的に有意な関連があるとはいえない。

5. 6. 4 保護者同士のやりとりと子育て不安（子育てを行っていて感じる不安・不安の原因）のまとめ

結果として、仮説Ⅱは「保護者のやりとり」と子育て不安における「ストレス」の関連のみ検証された。つまり、保護者のやりとりが多いほどストレスは少ない、ということになる。これは、保護者とのやりとりが増えることによって自分の抱えているストレスを発散することができたり、お互い子どもを育てているということで共有・共感することができるためであると考えられる。

5. 7 子育ての話ができる友人の人数と子育て不安（子育てを行っていて感じる不安・不安の原因）：仮説Ⅲの検証

この節では、仮説Ⅲの「子育ての話ができる友人の人数が多いほど、子育て不安が低い」を検証するために、子育ての話ができる友人の人数と子育てに対する不安（子育てを行っていて感じる不安・不安の原因）との関連を見る。

5. 7. 1 「子育ての話ができる友人の人数」と「難解性」「ストレス」の単回帰分析

「子育ての話ができる友人の人数」と子育てを行っていて感じる不安との関連を見るために、「子育ての話ができる友人の人数」と「難解性」「ストレス」との単回帰分析を行った。

まず、「子育ての話ができる友人の人数」を独立変数、「難解性」を従属変数とする単回帰分析の結果は、「難解性=10.62+(-0.11)×子育ての話ができる友人の人数」($R^2=0.0255$ 、 $p=<.0001$) となった。

次に、「ストレス」を従属変数とした単回帰分析の結果は、「ストレス=3.91+(-0.07)×子育ての話ができる友人の人数」($R^2=0.0326$ 、 $p=<.0001$) であった。

この2つの単回帰分析の結果、「子育ての話ができる友人の人数」が1人増えると、「難解性」は0.11点、「ストレス」は0.07点下がり、「難解性」が「ストレス」より0.04点多く下がることが示された。但し、どちらも有意であるものの、決定係数である R^2 が低いため、モデルのあてはまりは悪く、従属変数「難解性」「ストレス」どちらも、約3%しか独立変数「子育ての話ができる友人の数」では説明することができないため、モデルとしての有用性は低いと判断される。

5. 7. 2 「子育ての話ができる友人の人数」と「教育」「保健・健全性」の単回帰分析

子育ての話ができる友人の人数と子育て不安の原因との関連をみるために、「子育ての話ができる友人の人数」と「教育」「保健・健全性」変数との単回帰分析を行った。

まず、「子育ての話ができる友人の人数」を独立変数、「教育」を従属変数とする単回帰分析の結果は、「教育=7.32+(-0.07)×子育ての話ができる友人の人数」($R^2=0.0283$ 、 $p=<.0001$) となった。

次に、「保健・健全性」を従属変数とした単回帰分析の結果は、「保健・健全性=4.85+(-0.06)×子育ての話ができる友人の人数」($R^2=0.0259$ 、 $p=<.0001$) だった。

この2つの単回帰分析の結果、「子育ての話ができる友人の人数」が1人増えると、「教育」は0.07点、「保健・健全性」は0.06点下がり、「教育」が「保健・健全性」より0.01点多く下がることが示された。ただし、どちらも有意であるものの、決定係数である R^2 が低いため、モデルのあてはまりは悪く、従属変数「教育」「保健・健全性」とも、約3%しか独立変数「子育ての話ができる友人の数」では説明することができないため、モデルとしての有用性は低いと判断される。

5. 7. 3 子育ての話ができる友人の人数と子育て不安（子育てを行っていて感じる不安・不安の原因）のまとめ

結果、仮説IIIは検証された。「子育ての話ができる友人の人数」が増えれば、「難解性」「ストレス」「教育」「保健・健全性」の項目すべてが下がることが示された。

5. 8 親族との同居と子育てを行っていて感じる不安との関連：仮説IVの検証

ここでは、仮説IV「自分の／配偶者の母親と同居している保護者は、同居していない保護者より子育て不安が低い」を検証するために、親族との同居と子育てに対する不安（子育てを行っていて感じる不安・不安の原因）との関連を見る。

表5-8、表5-9、表5-10、表5-11は「配偶者」「母親」「父親」との同居の有無と「難解性」「ストレス」「教育」「保健・健全性」との関連をみるためにt検定を行った結果である。なお、「きょうだい」「祖父母」「その他」は「同居している」のサンプル数が極少数だ

ったため、分析から除外した。

t検定の結果、どれも統計的な有意差はなく、親族との同居と子育て不安との関連はみられなかった。

仮説では、自分の、あるいは配偶者の母親と同居している保護者は、家族内に子育て経験者（あるいは子育てを手伝ってくれる可能性の高い人）がいるため、子育て不安が低くなるのではないかと考えたが、子育てをしている保護者がどのような関係の親族と同居していても子育て不安には影響がないことがわかった。

よって、今回の調査では、仮説IVは検証することができなかつた。

表 5-8 親族との同居と難解性

		N	平均	t 値	p 値
配偶者	同居している	668	9.8	-0.07	0.9429
	同居していない	81	9.8		
自分の/配偶者の 母親	同居している	87	9.8	0.02	0.9806
	同居していない	662	9.8		
自分の/配偶者の 父親	同居している	60	10.6	-1.29	0.1966
	同居していない	689	9.8		

表 5-9 親族との同居とストレス

		N	平均	t 値	p 値
配偶者	同居している	671	5.7	-0.56	0.5767
	同居していない	81	5.5		
自分の/配偶者の 母親	同居している	87	5.3	1.08	0.2786
	同居していない	665	5.7		
自分の/配偶者の 父親	同居している	60	5.0	1.69	0.0951
	同居していない	692	5.7		

表 5-10 親族との同居と教育

		N	平均	t 値	p 値
配偶者	同居している	676	6.8	0.95	0.3440
	同居していない	82	7.1		
自分の/配偶者の 母親	同居している	86	6.8	-0.67	0.5057
	同居していない	672	7.0		
自分の/配偶者の 父親	同居している	59	7.4	-0.57	0.1177
	同居していない	699	6.8		

表 5-11 親族との同居と保健・健全性

		N	平均	t 値	p 値
配偶者	同居している	676	4.4	1.22	0.2211
	同居していない	81	4.8		
自分の/配偶者の 母親	同居している	85	4.6	-0.63	0.5307
	同居していない	672	4.4		
自分の/配偶者の 父親	同居している	59	4.9	-1.56	0.1188
	同居していない	698	4.4		

5. 9 子どもの人数と子育て不安（子育てを行っていて感じる不安・不安の原因）

仮説Vの検証

この節では、仮説Vの「子どもの人数が多いほど、子育て不安が低い」を検証するために、子どもの人数と子育てに対する不安（子育てを行っていて感じる不安・不安の原因）との関連を見る。

5. 9. 1 「子どもの人数」と「難解性」「ストレス」の単回帰分析

子どもの人数と子育て不安を行っていて感じる不安との関連を見るために、「子どもの

人数」と「難解性」「ストレス」変数との単回帰分析を行った。

はじめに、「子どもの人数」を独立変数、「難解性」を従属変数とする単回帰分析の結果は、「難解性=11.15+(-0.62)×子どもの人数」($R^2=0.0087$, $p=0.0107$)となった。これは、「子ども」が1人増えることで、子育てを行っていて感じる不安の「難解性」が0.62点下がることを示している。しかし、有意ではあるものの、モデルのあてはまりが悪く、決定係数である R^2 が0.0087と非常に低く、従属変数「難解性」の分散のうち約1%しか独立変数「子どもの人数」では説明できないため、モデルの有用性は低いと判断される。

次に、「子どもの人数」を独立変数、「ストレス」を従属変数とする単回帰分析の結果は、「ストレス=3.71+(-0.11)×子どもの人数」($R^2=0.0010$, $p=0.3859$)となった。分析の結果、「保護者同士のやりとり」と「保健・健全性」は統計的に有意な関連があるとはいえない。

5. 9. 2 子どもの人数と「教育」「保健・健全性」の単回帰分析

さらに、子どもの人数と子育て不安の原因との関連を見るために、「子どもの人数」と「教育」「保健・健全性」変数との単回帰分析を行った。

まず、「子どもの人数」を独立変数、「教育」を従属変数とする単回帰分析の結果は、「教育=6.82+0.02×子どもの人数」($R^2=0.0000$, $p=0.9124$)となった。分析の結果、「子どもの人数」と「教育」は統計的に有意な関連があるとはいえない。

次に「子どもの人数」を独立変数、「保健・健全性」を従属変数とする単回帰分析の結果は、「保健・健全性=4.67+(-0.11)×子どもの人数」($R^2=0.0009$, $p=0.4045$)となった。こちらの結果も、「子どもの人数」と「保健・健全性」も統計的に有意な関連があるとはいえない。

5. 9. 3 子どもの人数と子育て不安（子育てを行っていて感じる不安・不安の原因）

のまとめ

結果として、仮説IVは「子どもの人数」と子育てを行っていて感じる不安における「難解性」の関連のみ検証された。つまり、子どもの人数が多いほど子育てを難しいと考えなくなることがわかった。

5. 10 まとめ

本章では、保護者の外向性、保護者の社会関係（保護者同士のやりとり、子育ての話ができる友人の人数、親族との同居）、子どもの人数の3つの要因から保護者の子育てに対する不安への影響をみてきた。

保護者の外向性は、子育てを行っていて感じる不安と子育ての不安の原因を下げる傾向があるということがわかった。外向性が高い保護者は自分が感じている子育てに対する不安を自分でため込まず、周りの人に話して不安を緩和しているのだと考えられる。

また、子育ての話ができる友人の人数についても同じく、子育てを行っていて感じる不安と子育ての不安の原因を下げる傾向があるという結果になった。しかし、保護者同士のやりとりについてみると、子育て不安の原因の「ストレス」との間でしか関連を確認する

ことができなかった。

親族との同居については、どれも統計的な有意差はなく、親族との同居は、子育て不安を緩和させることと関連がないことが示された。

そして、子どもの人数は、子育てを行っていて感じる不安の難解性を緩和することが検証された。これは、子どもを育てた経験が影響を与えていると考えられる。

【参考文献】

- 小林真, 2004, 「インターネットの利用が母親の育児ストレスに及ぼす緩和効果」『富山大学教育学部紀要』58: 85-92.
- 厚生労働省編, 2011, 「ひとり親世帯の悩み等」『平成 23 年度全国母子世帯等調査結果報告』
(http://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/kodomo/kodomo_kosodate/boshi-katei/boshi-setai_h23/dl/h23_24.pdf, 2013 年 5 月 22 日).
- 中村真弓, 2008, 「育児不安と母親の仲間関係」『尚絅学園研究紀要 A.人文・社会科学編』第 2 号:1-12.
- 淑徳大学 総合福祉学部人間社会学科編, 2012, 『平成 23 年度 フィールドワーク調査報告書 第 9 号』.
- 柳井晴夫・柏木繁夫・国生理枝子, 2001, 「一般的性格」 山本眞理子編『心理測定尺度集 I 人間の内面を探る〈自己・個人内過程〉』 サイエンス社, 110-128.

第6章 千葉市の子育て支援と市民のニーズ

佐藤麻衣

6. 1 千葉市の子育て支援と「千葉市こども交流館」の「パパ・まま子育てサークル」

6. 1. 1 千葉市の子育て支援の概要

1992年に『国民生活白書』において初めて「少子化」という言葉が登場して以降、国や各地方自治体は、少子化の抑制に向けて、さまざまな取り組みをおこなっている。

なかでも、“子どもを安心して産み育てることのできる環境づくり”は、国や地方自治体がここ15年ほどの間、もっとも力を注いでいる事業のひとつだといえる。

こうした事業の基盤をなすのは、2003年（平成15年）に制定された「次世代育成支援対策推進法」である。この法令は「我が国における急速な少子化の進行並びに家庭及び地域を取り巻く環境の変化にかんがみ、次世代育成支援対策に関し、基本理念を定め、並びに国、地方公共団体、事業主及び国民の責務を明らかにするとともに、行動計画策定指針並びに地方公共団体及び事業主の行動計画の策定その他の次世代育成支援対策を推進するために必要な事項を定めることにより、次世代育成支援対策を迅速かつ重点的に推進し、もって次代の社会を担う子どもが健やかに生まれ、かつ、育成される社会の形成に資すること」を目的とし制定された（次世代育成支援対策推進法 第1条）。

千葉市ではこうした法令の施行を受けて、2005年（平成17年）3月、8つの基本目標と25の基本施策からなる「夢はぐくむ ちば 子どもプラン（千葉市次世代育成支援行動計画）」を策定し、子どもを安心して産み育てることのできる街づくりを目指し、さまざまな取り組みを実施している。

「夢はぐくむ ちば 子どもプラン」に掲げられた千葉市の主な事業は表6-1のとおりである（千葉市こども未来局こども未来部子ども企画課、2003）。

表6-1 「夢はぐくむ ちば 子どもプラン」における千葉市の主な事業（2003）

基本目標	基本施策	主な事業
1. 子育て家庭の「育児力」の向上	1. 子育てに必要な情報を得られるようにする	子育て総合コーディネート事業 子育てマップの作成
	2. 子育ての不安や悩みを解消し、家庭の子育てを支援する	地域子育て支援センター事業 子育てリラックス館運営事業
	3. 子育て家庭を経済的に支援する	私立幼稚園就園奨励費補助金
	4. 地域における子どもの居場所を確保する 5. 地域における子どもの活動の機会を提供する	児童センター（拠点施設）の整備 Wiークエンドふれあい広場事業
2. 地域の「育児力」の向上	6. 学校・家庭・地域の連携と子育てを支える人づくり	学校・家庭・地域連携まちづくり推進事業 子育てフォーラム（仮称）の設置

	7. 質の高い多様な保育サービスを提供する	保育所の整備等 一時保育事業 子どもルーム整備・運営事業
3. 仕事と家庭の両立支援	8. 子育て家庭にやさしい働き方を目指す	子育て支援連絡協議会(仮称)の設置 父親の育児休業取得の推進
	9. 男女が共に担う家庭生活づくり	就職サポート事業
4. 子どもと母親の健康づくり	10. 安心できる出産・育児と子どもの健康増進を図る	母乳哺育の推進 出産・育児の電話相談
	11. 安心して医療を受けられるようにする	ぜんそく等小児指定疾患医療費助成事業
	12. 食を通じて心身の健全育成を図る	食生活改善推進員による地域活動
5. 次代を担う人間をはぐくむ教育の充実	13. 次代の親への意識づけを図り、家庭の教育力を高める	思春期教室
	14. すべての子どもがいきいきと学べる学校教育を目指す	子どもと親の相談員活用事業
	15. 多様な体験を通じて豊かな心身をはぐくむ	農山村留学推進事業 少年自然の家運営事業
	16. 幼児教育の充実を図る	幼児教育支援センター事業
6. 子育て家庭にやさしいまちづくり	17. 子育て家庭が安心して外出できるようにする	交通安全施設整備 公共施設における子育てバリアフリー化
	18. 子どもが自然と触れ合う身近な遊び場を確保する	子どもたちの森整備事業
	19. 子育て家庭が住まいを得やすいように支援する	子育てに関する情報を含めた住情報の提供
7. 支援が必要な子供と家庭への対応	20. 障害のある子どもの生活と教育を支援する	心身障害児居宅支援費
	21. 援護を必要とする子どもの生活を支援する	子育て短期支援事業(ショートステイ事業) 子育て支援短期事業(トワイライトステイ事業)
	22. ひとり親家庭の自立を支援する	自立支援訓練給付金事業等 ひとり親家庭生活支援事業
	23. 子どもの虐待とDV被害を防ぐ	育児支援家庭訪問事業 児童虐待相談体制の整備
8. 子どもの安全の確保	24. 子どもを事故から守る	学校安全ボランティア推進事業
	25. 子どもを犯罪から守る	防犯対策事業

6. 1. 2 千葉市子ども交流館の概要

「千葉市子ども交流館」（以下、「交流館」と記載）は、主に、前節で述べた「基本目標 2：地域の『育児力』の向上」>「基本施策 4：地域における子どもの居場所を確保する」>「児童センターの整備」に対応する形で¹、2007 年（平成 19 年）10 月、千葉市街地にできた複合施設「Qiball（きぼーる）」の 3～5 階に、Qiball のオープンと同時に開設された。

3 階には「遊びのフロア」としてロビーやアリーナが、4 階には「創造のフロア」として音楽スタジオや工房、調理室、学習室、多目的室が、5 階には「憩いのフロア」として AV コーナーや図書コーナー、パソコンコーナー、プレイルームなどが設置されている。

開館時間は午前 9 時から午後 8 時まで、休館日は毎週火曜日、入館料や施設使用料は原則無料となっており、18 歳未満の者であれば 3～5 階にある施設のすべてを誰でも自由に使うことができる（ただし、未就学児は保護者同伴）。

また、親子で参加できる多種多様なイベントや、外部から講師を招いての料理教室や工作教室、音楽教室といった有料の講座なども行われている。

6. 1. 3 千葉市子ども交流館における「子育てばば・ままサークル」

交流館はこれまでさまざまな講座やイベントを開催してきたが、その多くは子どもを対象とした事業であった。しかし 2013 年（平成 25 年）4 月からは新たに、子育て中の保護者の育児不安の軽減・解消を目的とした「子育てばば・ままサークル」事業（以下、「ばば・ままサークル」と記載）を立ち上げることとなった。

育児不安の軽減や解消を目的とした育児サークルは、近年では珍しくない。そもそも、育児不安は 1980 年代後半には社会問題として取り上げられており²、「子育て支援」という用語やその必要性が一般にも広く普及した 90 年代以降は、各自治体や NPO など、さまざまな主体によって数多くの子育てサークルが設置・結成されてきた。実際、千葉市でも中央区だけすでに 20 の子育てサークルが存在している³。

しかしながら、こうした子育てサークルの大半は、子どもの年齢を乳幼児や未就学児に限定しており、小学校入学後の子どもをもつ保護者のための子育てサークル等はほとんど見られない⁴。こうした現状を受けて、交流館では、子どもの心身の成長過程や社会環境の変化を鑑みるに、小・中・高校生の親の悩みや不安も多大なものであろうという予測のもと、ふだんから小・中・高校生の出入りの多い自施設の特性を活かし、乳幼児の保護者のみならず、小・中・高校生の保護者も参加しやすい「新しい子育てサークルの形」をつくりていくことを目指し、「ばば・ままサークル」の設立に至った。

¹ 千葉市や交流館などの Web サイトやパンフレットには設立の経緯は明記されていないものの、「夢はぐくむ ちば 子どもプラン」の進捗状況報告では、交流館の活動は上述の目標および施策の報告として挙がっている。また、交流館設立の前年に行われている千葉市議会定例会（2006 年 9 月 26 日 平成 18 年度第 3 回定例会）では、小西由希子氏が「子ども交流館は児童センターとして計画されてきており」と述べており（発言番号 73）、他の市議会議員から訂正の発言はないことからも、交流館の設立は「児童センターの整備」にあったと考えられる。

² 育児不安を取り上げた先駆的な研究としては、牧野（1982）を参照。

³ 千葉市保健福祉局健康部健康支援課サイト内「子育てサークル一覧表（中央区版）」参照。

⁴ 先に挙げた千葉市中央区の子育てサークル 20 の内訳は、乳幼児をもつ親・0～3 歳の子をもつ親・未就園児の親を対象としたサークルが計 16、未就学児をもつ親を対象としたサークルが 1、アレルギー等の疾患をもつ子どもの親・ダウントン症児をもつ親・多胎児をもつ親を対象としたサークルが各 1（計 3）である。

6. 1. 4 「ぱぱ・ままサークル」の実施に伴うニーズ調査の必要性

先述したとおり、現在活動している数多くの子育てサークルは、主に乳幼児の保護者を対象としており、小学校入学後の子どもをもつ保護者のための子育てサークルはほとんど見られない。また、学術的な調査・研究を見てみても、やはり、小学校入学後の子どもをもつ保護者の子育て不安に着目した研究は少ないと言ってよい⁵。

しかし、なぜ小学校入学後の子どもをもつ保護者を対象とした子育てサークルや調査研究はないのだろうか。そうした年代の子どもをもつ保護者には、子育て中の悩みや不安などない、ということなのだろうか。あるいは、悩みや不安はあったとしても、「サークル」というかたちでの悩みや不安の解消は望んでいない、ということなのだろうか。

本調査ではこうした疑問をもとに、小・中学生の保護者に対し、子育てサークル（「ぱぱ・ままサークル」）へのニーズの有無、および、ニーズがあるとすればどのようななかたちのサークルを望んでいるのか等を調査することとした。

6. 2 調査結果

6. 2. 1 交流館の認知度および利用状況

「ぱぱ・ままサークル」のニーズ把握に先立ち、まずは交流館の認知度および認知経路、利用経験等を尋ねた。

交流館の認知度については、761人中600人（78.8%）が「知っていた」と回答しており、ほとんどの人が交流館の存在を以前から知っていたことがわかる。

これら、交流館を「知っていた」と答えた600人に、その認知経路を複数回答で聞いたところ（表6-2）、「千葉市の広報」（34.5%）、「子育てハンドブック」（20.2%）といった自治体の配布物、および「他の保護者から聞いた」（31.3%）、「子どもから聞いた」（16.2%）といった口コミ、という2つの経路から知ったという人が多かった。

また、「Qiball（きぼーる）のホームページ」で知ったという人も多く（29.4%）、「その他」の自由記述欄に「Qiball（きぼーる）に行ったときに知った」といった回答が28件（「その他」121件中の23.1%）あったことからも、複合施設の中に設置されたこともまた、交流館の認知度を高める要因となっていることがわかる。

⁵ 参考までに、「『子育て』 and (『不安』 or 『悩み』) and (『小学』 or 『中学』)」をキーワードとして、国立情報学研究所が運営する学術論文の情報データベース「Cinii Articles」にて論文の検索をおこなってみると、小・中学生をもつ保護者の家庭内での子育てのしかたや、それにともなう不安や悩みを中心的に取り上げた論文は以下の5件のみであった（ただし、論文抄録は除く。以下、並び順は刊行年順）。

酒井亮爾, 1999, 「中学生の不登校に関する事例報告」『人間文化：愛知学院大学人間文化研究所紀要』14: 267-290.
山本淳子・大久保智生・藤井浩史・辻幸治・横山新二・有馬道久, 2007, 「学級規模が児童の学級適応に及ぼす影響

(2)：保護者の意識調査から」『香川大学教育実践総合研究』15: 41-47.

神田直子・山本理絵, 2009, 「小学生をもつ親の子育て状況・不安と子どもの特性：『第5回愛知の子ども縦断調査』結果第1報」『愛知県立大学教育福祉学部論集』58: 1-10.

神田直子・山本理絵, 2011, 「小・中学生をもつ親の子育て状況と不安、子どもの特性：『第6回愛知の子ども縦断調査』結果第1報」『大阪千代田短期大学紀要』40: 27-44.

内田美津子・安部順子, 2013, 「母親の対人関係の広がりと子育て支援：小学生を持つ親へのグループアプローチによる援助の試み」教育大学教育実践研究指導センター, 『教育実践研究』21: 181-187.

表 6-2 交流館の認知経路（複数回答）

n=479

1 千葉市の広報	34.5 %
2 子育てハンドブック	20.2 %
3 千葉市のホームページ	10.9 %
4 Qiball（きぼーる）のホームページ	29.4 %
5 他の保護者から聞いた	31.1 %
6 子どもから聞いた	16.2 %
7 子どもの通う学校の先生から聞いた	1.9 %
8 その他	25.4 %
9 覚えていない	10.9 %

※「その他」(121件)として多く挙げられていたのは、「Qiball（きぼーる）を訪れたさいに知った」(28件)、「子ども以外の家族員から聞いた」(8件)、「家が近くにあるので知っていた」(8件)、「友人・知人から聞いた」(3件)であった。

これらの認知経路に、属性別の違いはあるのだろうか。

子どもの学齢、および保護者の性、年齢階級と、各認知経路への回答の有無をクロス集計し、フィッシャーの正確検定をおこなった⁶。その結果、統計的に有意な差が見られたものは、表6-3および表6-4のとおりである。

表 6-3 子どもの学齢と認知経路（有意差があったもののみ）

子育てハンドブック		他の保護者から聞いた					
	あてはまる	あてはまらない	計		あてはまる	あてはまらない	計
小学生の親	23.5%	76.5%	100% 362 人	小学生の親	34.5%	65.5%	100% 362 人
中学生の親	9.6%	90.4%	100% 114 人	中学生の親	20.2%	79.8%	100% 114 人
計	20.2%	79.8%	100% 476 人	計	31.1%	68.9%	100% 476 人
			p=0.001				p=0.004
子どもから聞いた		子どもの通う学校の先生から聞いた					
	あてはまる	あてはまらない	計		あてはまる	あてはまらない	計
小学生の親	9.4%	90.6%	100% 362 人	小学生の親	1.1%	98.9%	100% 362 人
中学生の親	37.7%	62.3%	100% 114 人	中学生の親	4.4%	95.6%	100% 114 人
計	16.2%	83.8%	100% 476 人	計	1.9%	98.1%	100% 476 人
			P=0.000				p=0.040

表 6-4 保護者の年齢階級と認知経路（有意差があったもののみ）

Qiball（きぼーる）のホームページ		子どもから聞いた					
	あてはまる	あてはまらない	計		あてはまる	あてはまらない	計
20代	37.5%	62.5%	100% 8 人	20代	12.5%	87.5%	100% 8 人
30代	30.2%	69.8%	100% 212 人	30代	8.5%	91.5%	100% 212 人
40代	30.1%	69.9%	100% 239 人	40代	21.3%	78.7%	100% 239 人
50代	0.0%	100.0%	100% 16 人	50代	43.8%	56.3%	100% 16 人
計	29.3%	70.7%	100% 475 人	計	16.2%	83.8%	100% 475 人
			p=0.028				p=0.000

まず、子どもの学齢別の集計（表6-3）をみてみると、中学生の保護者よりも小学生の保護者の方が、交流館の認知経路として「子育てハンドブック」や「他の保護者から聞いた」を挙げる人が多かった。一方、「子どもから聞いた」「子どもの通う学校の先生から聞いた」という回答では、小学生の保護者よりも中学生の保護者の方が多かった。こうした結果から、保護者は、子どもが低年齢のうちは、つまりは子どもの情報伝達能力が十分ではないうちは、公的機関や他の保護者とのネットワークによって情報を獲得しており、子どもがある程度の年齢になり、情報伝達能力が十分に発達したあとには、子どもをとお

⁶ 以下、クロス表の統計的検定はすべてフィッシャーの正確検定による。

した情報獲得をおこなっている、と見ることができるだろう。

保護者の性別では、女性よりも男性の方が認知経路を「覚えていない」という回答が多くなったが、それ以外の項目において有意な差は見られなかった。

保護者の年齢階級別の集計（表6-4）では、「Qiball（きぼーる）のホームページ」で交流館を知ったと答えた人は、20代～40代では30%台となっているが、50代では皆無であった。近年、インターネットを通じた情報配信の有用性が叫ばれているが、やはり若い世代においては、こうした情報発信の方法は有効であることがうかがえる。それに対し、「子どもから聞いた」と答えた人は、50代にもっとも多く、20代と30代は10%前後にとどまった。

次に、交流館を知らなかった人を除く600人に対し、交流館の利用経験を尋ねた。その結果、交流館を「訪れたことがある」と回答した人は492人（82.0%）で、交流館を知っていた人のほとんどは、実際に交流館を訪れた経験もあることがわかった。

どのようなときに交流館を訪れたのかを複数回答で尋ねてみると、「通常の開館日」が92.2%ともっとも多く、次いで「イベント」（27.1%）、「親子で参加する講座」（13.3%）となっていた。したがって、交流館を訪れたことのある保護者のほとんどは、イベントや講座といった何らかの催し物がおこなわれている場合にではなく、通常の開館日に子どもの付き添いとして訪れていたことがわかる。

では、子どもの学齢によって、保護者の交流館の利用理由に違いはあるのだろうか。表6-5は、子どもの学齢と保護者の交流館の利用理由とをクロス集計し、フィッシャーの正確検定にかけた結果である⁷。

表6-5 子どもの学齢と交流館の利用理由

		あてはまる	あてはまらない	計	p
1 親子で参加する講座	小学生の親	13.8	86.2	100% 384人	0.628
	中学生の親	11.7	88.3	100% 103人	
2 イベント	小学生の親	28.1	71.9	100% 384人	0.383
	中学生の親	23.3	76.7	100% 103人	
3 通常の開館日	小学生の親	93.5	6.5	100% 384人	0.037
	中学生の親	87.4	12.6	100% 103人	

「親子で参加する講座」や「イベント」では、子どもの学齢によって差は見られなかつたが、「通常の開館日」では5%水準で統計的な有意差が見られた。すなわち、中学生の保護者に比べ、小学生の保護者のほうが「通常の開館日」に子どもとともに交流館を訪れていることが多い。一般的にも、中学生よりも小学生のほうが日常的に保護者と行動をともにすることが多いと考えられるため、この結果は妥当であろう。

また、小学生の保護者・中学生の保護者とともに、イベントや講座の開かれている日に交流館を訪れたことがある人は少数であったものの、保護者の参加希望がまったくないわけではない。

表6-6は、交流館の認知の有無にかかわらず、全ての調査対象者に対し、「小学生や中学生を対象とした親子で参加できる講座を開いた場合、あなたはお子さんと一緒に参加したいと思いますか」と尋ねた結果である。

⁷ 「その他」は、具体的な利用理由が明らかではないものを分類したカテゴリーであるため、分析から除外した。

表 6-6 親子参加型の講座への参加意向

1 ぜ ひ 参 加 し た い い	2 参 加 し た ま り な い	3 参 加 し た く な い	4 参 加 し た く な い	p	△ 参 加 し た い い △ 参 加 し た く な い △ 参 加 し た く な い	p	計	
小学生の親	24.8	53.9	19.4	1.9	***	78.7	21.3	*** 100% 521 人
中学生の親	5.4	46.0	41.1	7.6		51.4	48.7	100% 224 人
計	18.9	51.5	25.9	3.6		70.4	29.5	100% 745 人

*** : p<0.001 ** : p<0.01 * : p<0.05 + : p<0.1

この結果を見るに、子どもが小学生の場合には約8割の保護者が、子どもが中学生の場合であっても約半数の保護者が、「ぜひ参加したい」あるいは「参加したい」(=表中の<参加したい>⁸⁾と回答している。とくに、小学生の親は中学生の親よりも強い参加希望意志をもっており、4人に1人は「ぜひ参加したい」と回答している。

したがって今後は、こうした保護者のニーズに応えるためにも、小学生や中学生の保護者も子どもとともに参加できるような催し物が望まれる。

6. 2. 2 子どもの交流館の利用頻度と子どもが交流館を利用することに対する保護者の意識

続いて、再度、交流館を「知っていた」とする600人に対し、子どものここ1年間での交流館の利用頻度を、そして交流館を知っていたか、知らなかつたかにかかわらず、すべての調査対象者に対し、子どもが交流館を利用することに対する保護者の安心感や不安感について尋ねた。

まず、子どもの交流館の利用頻度では、全体で見ても学齢別で見ても、「ここ1年間では利用していない」という回答がもっとも多かった。しかし、学齢別でクロス集計し、フィッシャーの正確検定にかけた結果、小学生と中学生の利用頻度には、1%水準で統計的に有意な差が見られた（表6-7）。

表 6-7 子どもの学齢と交流館の利用頻度

	月1回以上	2～3ヶ月に1回程度	半年に1回程度	年に1回程度	ここ1年間では利用していない	わからない	合計
小学生	35	69	90	89	138	15	436
	8.0%	15.8%	20.6%	20.4%	31.7%	3.4%	100.0%
中学生	15	11	18	18	69	11	142
	10.6%	7.7%	12.7%	12.7%	48.6%	7.7%	100.0%
合計	50	80	108	107	207	26	578
	8.7%	13.8%	18.7%	18.5%	35.8%	4.5%	100.0%

p=0.002

小学生では、「ここ1年間では利用していない」という回答は全体の約3分の1となっており、多くの子どもがここ1年で交流館を訪れたことがわかる。とはいえ、利用した者に限って言えば、「2～3ヶ月に1回程度」が15%、「半年に1回程度」と「年に1回程度」が2割となっており、「月に1回以上」は1割に満たない。一方、中学生では、「ここ1年

⁸ 以下、このように回答項目を統合した場合には山括弧(<>)をつけて表記することとする。

間では利用していない」が半数近くいる反面、「月1回以上」「2～3ヶ月に1回程度」「半年に1回程度」「年に1回程度」がそれぞれ1割前後となっており、交流館を利用している子どもに関して言えば、その利用頻度は分散している傾向にある。

さて、こうした交流館は、先にも述べたが、未就学児を除き、子どもだけで利用することができ、実際にも、多くの子どもは親を伴わず、子どもたちだけで来館している。こうした現状を顧みるに、とくに子どもの年齢が低い場合には、保護者の側には子どもが交流館を訪れるに対し、多かれ少なかれ不安を抱いていることが予想される。

そこで、子どもが交流館を利用することに対する保護者の安心感や不安感について尋ねた（表6-8）。

表6-8 交流館に対する保護者の安心感・不安感

	1 そ う 思 う	2 や や そ う 思 う	3 そ う 思 わ な い	4 そ う 思 わ な い	△ そ う 思 う	△ そ う 思 わ な い	計
a. 千葉市の施設なので安心して子どもを通わせられる	45.6	44.5	8.1	1.7	90.2	9.8	100 % 743人
b. 遊び場に指導員がついているので安心して子どもを通わせられる	42.2	48.4	8.1	1.3	90.6	9.4	100 % 742人
c. 街中にあるので、子どもだけで通わせることに不安を感じる	28.4	39.8	23.5	8.3	68.2	31.8	100 % 739人
d. 家から「子ども交流館」までは距離があるので子どもだけで通わせることに不安を感じる	48.3	26.4	16.7	8.6	74.7	25.3	100 % 743人
e. どのような施設なのかがわからず不安を感じる	3.9	13.4	36.2	46.6	17.3	82.7	100 % 741人
f. 指導員がどのような人なのかがわからず不安を感じる	3.7	19.9	42.9	33.6	23.5	76.5	100 % 739人
g. 子ども交流館で子どもがどのように過ごしているかわからず不安を感じる	3.8	24.2	41.2	30.8	28.0	72.0	100 % 740人

「a. 千葉市の施設なので安心して子どもを通わせられる」「b. 遊び場に指導員がついているので安心して子どもを通わせられる」といった、公共施設独自の利点に関しては、およそ9割の保護者が「そう思う」と回答している。とはいえ、「e. どのような施設なのかがわからず不安を感じる」「f. 指導員がどのような人なのかがわからず不安を感じる」といったaやbと同じく施設や指導員に対する評価を問う質問に対して「そう思う」と答えた人も2割前後存在している。また、「g. 子ども交流館で子どもがどのように過ごしているかわからず不安を感じる」といった質問に「そう思う」と答えた人も3割近くいるため、施設内部の様子や指導員のもつ資格、交流館での子どもたちの過ごし方など、より具体的な事柄を広報していくことで、交流館に対する安心感はいつそう高くなるのではないかと考えられる。

「c. 街中にあるので、子どもだけで通わせることに不安を感じる」「d. 家から『子ども交流館』までは距離があるので子どもだけで通わせることに不安を感じる」といった、交流館の立地環境については、どちらもおおよそ7割程度の人が「そう思う」と回答していた。つまり、交流館に子どもを通わせることに対する保護者の不安は、その多くが立地環境にあるとみてよい。立地環境は交流館だけの力では改善が難しいであろうが、これだけ多くの保護者が不安を感じているとするならば、自治体単位で何らかの取り組みをおこなう必要があろう。

さて、では、こうした保護者の安心感や不安感は、やはり子どもの学齢によって異なるのだろうか。表6-9は、a～gそれぞれの項目について、子どもの学齢と交流館に対する保護者の安心感・不安感をクロス集計し、フィッシャーの正確検定をおこなった結果である。

表6-9 子どもの学齢と交流館に対する保護者の安心感・不安感

	1 そ う 思 う	2 や や そ う 思 う	3 そ う あ 思 わ な い	4 そ う あ ま り な い	p	△ そ う 思 う ▽	△ そ う 思 わ な い ▽	p	計	
a. 千葉市の施設なので安心して子どもを通わせられる	小学生の親 中学生の親	44.6 48.0	44.4 44.4	9.0 6.3	1.9 1.3	n.s.	89.0 92.4	10.9 7.6	n.s. n.s.	100% 513人 100% 223人
b. 遊び場に指導員がついているので安心して子どもを通わせられる	小学生の親 中学生の親	40.7 45.0	48.0 49.5	9.6 5.0	1.8 0.5	+	88.7 94.5	11.4 5.5	*	100% 513人 100% 222人
c. 街中にあるので、子どもだけで通わせることに不安を感じる	小学生の親 中学生の親	35.4 12.7	41.8 36.4	18.4 34.5	4.5 16.4	***	77.2 49.1	22.9 50.9	***	100% 512人 100% 220人
d. 家から「子ども交流館」までは距離があるので子どもだけで通わせることに不安を感じる	小学生の親 中学生の親	61.7 18.0	24.7 30.2	9.7 32.9	3.9 18.9	***	86.4 48.2	13.6 51.8	***	100% 514人 100% 222人
e. どのような施設なのかがわからず不安を感じる	小学生の親 中学生の親	3.9 4.1	12.3 16.2	36.5 35.1	47.3 44.6	n.s.	16.2 20.3	83.8 79.7	n.s. n.s.	100% 512人 100% 222人
f. 指導員がどのような人なのかがわからず不安を感じる	小学生の親 中学生の親	3.7 3.6	18.8 23.1	45.2 37.1	32.3 36.2	n.s.	22.5 26.7	77.5 73.3	n.s. n.s.	100% 511人 100% 221人
g. 子ども交流館で子どもがどのように過ごしているかわからず不安を感じる	小学生の親 中学生の親	3.7 4.1	27.1 18.1	40.8 41.2	28.3 36.7	*	30.8 22.2	69.1 77.9	*	100% 512人 100% 221人

*** : p<0.001 ** : p<0.01 * : p<0.05 + : p<0.1

まず、「c. 街中にあるので、子どもだけで通わせることに不安を感じる」および「d. 家から『子ども交流館』までは距離があるので子どもだけで通わせることに不安を感じる」の2項目においては 0.1%水準で有意な差がみられた。いずれも、子どもが小学生の場合のほうが「不安を感じる」とする回答が多く、まだ幼い子どもが街中へ、あるいは家から距離のあるところへ出かけることに対する保護者の不安の高さが読み取れる⁹。

さらに、「g. 子ども交流館で子どもがどのように過ごしているかわからず不安を感じる」においては 5%水準での有意差がみられ、やはり子どもが小学生の場合のほうが「不安を感じる」とする回答が多かった。また、「b. 遊び場に指導員がついているので安心して子どもを通わせられる」では、4件法の場合には 10%水準での有意傾向が、2カテゴリーにまとめた場合には 5%水準での有意差がみられ、中学生の親のほうが指導員がいることに安心感を感じている傾向がうかがえた。これらの結果からは、子どもが低年齢の場合には、たとえ指導員がついていたとしても、子どもがどのように過ごしているか、何か危ないことはしていないなど、保護者の不安は高いということがうかがえるだろう。

⁹ こうした保護者の不安を裏付けるように、今回のアンケートの余白部分には、複数の保護者から「交流館はよい施設だと思うが、もっと小規模であってもいいから、近所にも似たような機能を果たす施設が欲しい」との声が寄せられていた。以下、保護者から寄せられた声の一部を紹介する。

- ・ きぼーるは良い施設だとは思いますが、毎日利用できる子供は限られています（距離的に）。我が家近くにも指導員が常駐している遊べる施設があるとうれしいです。
- ・ 子ども交流館は無料と言っているが、車を利用する者は駐車場代がかなりかかる。市の無料の施設と言いながら、事実有料であり、一部の近所の人しかゆっくり楽しむことができない。
- ・ 交流館はすばらしい施設だと思いますが、電車か車じゃないといけないので気軽にに行けない場所（駐車場代、電車代がかかるし）だと感じました。もう少し小規模でいいので子供が自力で行けて集まれる施設があるとよい。

なお、紙面の都合上、すべての保護者のコメントを紹介することはできないが、これ以外に寄せられた声もすべて、本報告書とともに交流館や千葉市役所に届けられている。

以上のことから、保護者たちはやはり、子どもが交流館に通うことに対し、完全に安心しているわけではなく、多少なりとも何らかの不安を抱えていることがわかる。では、保護者たちは、そうでありながらも、何を求めて子どもが交流館に通うことを許容しているのだろうか。

表6-10は、子どもが交流館を利用することで、保護者が以下のa～eのような事柄をどの程度期待しているのかを尋ねた結果である。

表6-10 保護者が交流館に期待すること

期待している	1	2	3	4	△期待している	△期待していない	計
	期待している	やや期待している	あまり期待していない	期待していない	△	△	
a. 子どもが楽しめること	75.9	21.4	1.9	0.8	97.3	2.7	100% 743人
b. 子どもが安全な場で遊べること	77.2	19.9	2.0	0.8	97.1	2.8	100% 742人
c. 子どもが将来役に立つ知識を身につけること	44.9	35.4	17.9	1.8	80.3	19.7	100% 741人
d. 子どもに友達ができること	31.5	35.1	29.3	4.1	66.6	33.4	100% 740人
e. 子どもに居場所ができること	34.7	37.5	24.2	3.6	72.2	27.8	100% 741人

「a. 子どもが楽しめること」「b. 子どもが安全な場で遊べること」といった事柄に関しては、約75%の保護者が「期待している」と答えており、「やや期待している」と合わせるとほぼ100%近くなる。また、「c. 子どもが将来役に立つ知識を身につけること」では、「期待している」と回答した親は45%ほどであるものの、「やや期待している」と合わせると8割となるため、知識の習得に関してもそれなりの期待があると言ってよい。

一方、「d. 子どもに友達ができること」と「子どもに居場所ができること」の2項目では、どちらも、「期待する」「やや期待する」はそれぞれ30%代となっており、a～cの3項目に比べると、その期待度はやや低い。とはいえ、それらを合わせた回答(=<期待している>)は7割程度となるため、やはり、友達づくりの場や居場所としての役割もそれなりに期待されていると見てよいだろう。

では、こうした交流館への期待についても、子どもの学齢別に違いが見られるかどうかをみていく。

表6-11は、子どもの学齢別に、保護者がa～eの事柄を交流館にどの程度期待しているのかをクロス集計し、フィッシュヤーの正確検定をおこなった結果である。

4件法の場合に限って言えば、「a. 子どもが楽しめること」では0.1%水準で、「b. 子どもが安全な場で遊べること」では5%水準で、「d. 子どもに友達ができること」と「e. 子どもに居場所ができること」では1%水準で、それぞれ有意差が見られた。いずれも、小学生の親のほうが中学生の親よりも、交流館への期待が高いことがわかる。とくに、「d. 子どもに友達ができること」に関しては、<期待している>と<期待していない>という2カテゴリーにまとめ検定にかけた場合にも、1%水準での有意差が出ている。他の項目と比較してみた場合にも、「d. 子どもに友達ができること」に対し、小学生の保護者で<期待している>と回答した人の比率は、中学生の保護者で<期待している>と回答した人に比べ、10ポイント以上高いことからも、子どもの学齢によって顕著な差があらわれているといつてよい。

表 6-1-1 子どもの学齢と保護者が交流館に期待すること

	期待している	期待していない	期待していない	期待していない	p	期待している	期待していない	p	計	
	期待している	期待していない	期待していない	期待していない	p	期待している	期待していない	p	計	
a. 子どもが楽しめること	小学生の親 中学生の親	80.2 66.1	17.9 29.5	1.5 2.7	0.4 1.8	***	98.1 95.6	1.9 4.5	+	100% 519 人 100% 224 人
b. 子どもが安全な場で遊べること	小学生の親 中学生の親	79.5 71.9	18.3 23.7	1.7 2.7	0.4 1.8	*	97.8 95.6	2.1 4.5	+	100% 518 人 100% 224 人
c. 子どもが将来役に立つ知識を身につけること	小学生の親 中学生の親	46.7 40.8	34.6 37.2	17.4 19.3	1.4 2.7	n.s.	81.3 78.0	18.8 22.0	n.s.	100% 518 人 100% 223 人
d. 子どもに友達ができること	小学生の親 中学生の親	34.6 24.2	35.4 34.5	27.1 34.5	2.9 6.7	**	70.0 58.7	30.0 41.2	**	100% 517 人 100% 223 人
e. 子どもに居場所ができること	小学生の親 中学生の親	36.5 30.5	37.6 37.2	23.7 25.1	2.1 7.2	**	74.1 67.7	25.8 32.3	+	100% 518 人 100% 223 人

*** : p<0.001 ** : p<0.01 * : p<0.05 + : p<0.1

一方、「c. 子どもが将来役に立つ知識を身につけること」に関しては、子どもの学齢による差は見られなかった。「将来役立つ知識」の習得は、子どもの学齢によって左右されず、いずれの親からも期待されているのだと言うことができる。

以上が、「ぱぱ・ままサークル」に限らず、交流館全般に関する設問への回答結果であった。次には、いよいよ、交流館が 2013 年に立ち上げた新事業「ぱぱ・ままサークル」への期待度やニーズを見ていきたい。

6. 2. 3 「ぱぱ・ままサークル」への参加意向

質問紙ではまず、「『子ども交流館』では、今年の 5 月から、『子育てぱぱ・ままサークル』という事業を立ち上げました。この事業は、0~18 歳までのお子さんをお持ちの保護者の方々を対象に、子育てに関する学習機会の提供、保護者同士の交流機会の提供、地域で働く専門職者との交流機会の提供などを目的としています」と、新事業の概要を説明した上で、「ぱぱ・ままサークル」への参加意向を尋ねた。

結果、「参加してみたい」と答えた人は全体の 6.1% と、非常に少なかった。「どちらかといえば参加してみたい」は 33.3% で、両者を合わせた場合でも 39.4% であり、参加を希望する人は半数を切る結果となった。

表 6-1-2 子どもの学齢別「ぱぱ・ままサークル」への参加意向

	参加してみたい	どちらかといえば参加してみたい	どちらかといえば参加しない	参加したい	p	参加してみたい	参加したくない	p	計
小学生の親	6.7	36.3	43.0	14.0	**	43.0	57.0	**	100% 523 人
中学生の親	4.8	26.5	45.2	23.5		31.3	68.7		100% 230 人
計	6.1	33.3	43.7	16.9		39.4	60.6		100% 753 人

*** : p<0.001 ** : p<0.01 * : p<0.05 + : p<0.1

子どもの学齢別で見てみると（表 6-1-2）、子どもが小学生である場合と中学生である場合には、正確検定の結果、有意水準 1%での差が見られ、子どもが小学生の場合のほう

が保護者の参加希望意志は強いことがわかった。とはいっても、＜参加してみたい＞と＜参加したくない＞という2カテゴリーにまとめた場合には、子どもが小学生の場合には半数近くの保護者が参加希望を伝えており、子どもが中学生の場合でも3人に1人は参加希望があるため、そこそこの需要はあると見ることができるだろう。

6. 2. 4 「ばば・ままサークル」の目的への興味の度合いと「ばば・ままサークル」への期待

次に、先に挙げた「ばば・ままサークル」の主な目的（a. 子育てに関する学習機会の提供、b. 保護者同士の交流機会の提供、c. 地域で働く専門職者との交流機会の提供）のそれぞれについて、どの程度興味があるかを尋ねた（表6-1-3）。

表6-1-3 「ばば・ままサークル」の目的への興味の程度

	1	2	3	4	△	△	
	興味 があ る	興味 があ る	興味 があ る	興味 があ る	興味 があ る	興味 があ る	計
a. 子育てに関する学習機会の提供	15.4	45.5	29.8	9.3	60.9	39.1	100 % 762人
b. 保護者同士の交流機会の提供	6.8	28.8	49.9	14.5	35.7	64.3	100 % 760人
c. 地域で働く専門職者との交流機会の提供	12.1	44.9	32.7	10.4	57.0	43.0	100 % 762人

その結果、もっとも＜興味がある＞という回答が多かったのは、「a. 子育てに関する学習機会の提供」(60.9%)であり、次いで「c. 地域で働く専門職者との交流機会の提供」(57.0%)、「b. 保護者同士の交流機会の提供」(35.7%)となっていた。子どもが小学生・中学生の場合には、学区が狭いため地域における保護者同士のつながりがすでにあることが予想され、加えて、保護者会等もあるため、「b. 保護者同士の交流機会の提供」は公的機関にはそれほど期待されないのかもしれない。

また、これら「ばば・ままサークル」の各目的への興味の度合いを、子どもの学齢別で見てみると（表6-1-4）、「a. 子育てに関する学習機会の提供」においてのみ、5%水準での有意な差が見られた。

表6-1-4 子どもの学齢別「ばば・ままサークル」の目的への興味の程度

	1	2	3	4	p	△	△	p	
	興味 があ る	興味 があ る	興味 があ る	興味 があ る		興味 があ る	興味 があ る		計
a. 子育てに関する学習機会の提供	小学生の親 16.7	47.0	28.7	7.6	*	63.7	36.3	*	100 % 526人
	中学生の親 12.2	43.2	31.4	13.1		55.4	44.5		100 % 229人
b. 保護者同士の交流機会の提供	小学生の親 7.3	29.8	50.2	12.8	n.s.	37.1	63.0	n.s.	100 % 524人
	中学生の親 5.7	27.5	48.5	18.3		33.2	66.8		100 % 229人
c. 地域で働く専門職者との交流機会の提供	小学生の親 11.2	45.7	33.5	9.5	n.s.	56.9	43.0	n.s.	100 % 525人
	中学生の親 14.3	43.9	30.0	11.7		58.2	41.7		100 % 230人

*** : p<0.001 ** : p<0.01 * : p<0.05 + : p<0.1

子どもが中学生の場合に比べ、小学生の場合のほうがより「a. 子育てに関する学習機会の提供」を必要としていることがわかる。

一方、「b. 保護者同士の交流機会の提供」と「c. 地域で働く専門職者との交流機会の提供」では有意な差は見られなかつたため、これらの需要は子どもの学齢によっては左右されないことが明らかとなった。

続いて、「パパ・ママサークル」に対し、以下の a ~ h のような事柄をどの程度期待するかを尋ねた（表 6-1-5）。

もっとも期待が高かったのは「b. 子育て支援等の情報が得されること」および「c. 子育てに関する知識をつけること」の 2 項目で、いずれも「期待する」と回答した人が 25% 強おり、「やや期待する」と合わせると 8 割を超えていた。先に挙げた「パパ・ママサークル」の各目的への興味の程度（表 6-1-3）でも、過半数の人が「a. 子育てに関する学習機会の提供」と「c. 地域で働く専門職者との交流機会の提供」に興味をもっていたことも考え合わせるに、やはり「パパ・ママサークル」への期待の多くは公的機関であるからこそ提供できる専門的な知識および情報にあると言つてよい。

表 6-1-5 「パパ・ママサークル」への期待の程度

	1	2	3	4	△ 期待する △ 期待や するや する	△ 期待しない △ 期待しない △	計
	期待する	期待や するや する	期待あり ない	期待しない △	△ 期待する △ 期待や するや する	△ 期待しない △ 期待しない △	
a. 子育ての悩みが解消されること	18.2	53.4	22.9	5.4	71.6	28.4	100 % 754 人
b. 子育て支援等の情報が得られること	27.7	54.9	13.7	3.7	82.6	17.4	100 % 754 人
c. 子育てに関する知識をつけること	25.9	57.5	13.4	3.2	83.4	16.6	100 % 753 人
d. 子育て以外に関する学びの場ができること	19.8	47.1	27.2	6.0	66.8	33.2	100 % 754 人
e. 子育てから離れた時間ができること	13.0	33.4	42.4	11.1	46.4	53.6	100 % 754 人
f. 子育て仲間（パパ友・ママ友）ができること	13.4	34.6	39.0	13.0	48.0	52.0	100 % 754 人
g. 親子での交流ができること	19.1	49.2	24.0	7.7	68.3	31.7	100 % 754 人
h. 子どもに友だちができること	20.5	43.8	29.1	6.6	64.2	35.8	100 % 752 人

また、b や c に続いて「a. 子育ての悩みが解消されること」(71.6%) も合わせて考えると、「b. 子育て支援等の情報が得られること」や「c. 子育てに関する知識をつけること」への期待は、それらをとおした「悩みの解消」へつながっていると見ることもできるだろう。

実際、「a. 子育ての悩みの解消」に＜期待する＞か＜期待しない＞かを独立変数とし、b ~ h のそれぞれの項目への回答を従属変数としたクロス集計をおこない、フィッシャーの正確検定をおこなったところ、「a. 子育ての悩みの解消」を＜期待する＞と回答した人は、＜期待しない＞と答えた人よりも、b ~ h のいずれにおいても「期待する」と回答する割合が有意に高かったものの、2 変数間の関連の強さを示す Cramer の V は、「b. 子育て支援等の情報が得られること」および「c. 子育てに関する知識をつけること」においてもっとも高かった（表 6-1-6）。つまり、「パパ・ママサークル」に対し、「a. 子育ての悩みの解消」を＜期待する＞人は、それ以外の項目のいずれについても期待度が高いが、とりわけ「c. 子育てに関する知識をつけること」と「b. 子育て支援等の情報が得られること」への期待が高いと見てよい。

6. 2. 5 「ぱぱ・ままサークル」に期待される実施形態と学習テーマ

最後に、「ぱぱ・ままサークル」に期待される具体的な実施形態および学習テーマについて述べたい。

質問紙ではまず、専門家を呼んだ講演会形式や茶話会形式など4つの実施形態を挙げ、それぞれについて、どの程度興味をもつかを尋ねた。その結果が表6-18である。

もっとも興味が高かったのは、「b. 専門職者をmajiedaワークショップ形式（専門職者による講義に加え、参加者も実習形式で参加する形式）」（57.0%）であり、次いで「a. 専門職者による講演会形式（専門職者がその専門分野について講演を行う形式）」（51.8%）であった。

一方、「c. 子育て経験者や『子ども交流館』の職員を中心とした座談会形式（子育て経験者や職員がまとめ役となって会話をを行う形式）」（37.3%）や「d. 子育て期にある親のみの茶話会形式（とくにまとめ役を設定せず、参加者が気ままに話す形式）」（28.0%）では、＜興味がある＞と回答した人の割合は低かった。

表6-18 各実施形態に対する興味の程度

	1 興 味 が あ る	2 興 味 が あ る	3 興 味 や や り い	4 興 味 あ ま り い	△ 興 味 が あ る	△ 興 味 が な い	計
a. 専門職者による講演会形式 （専門職者がその専門分野について講演を行う形式）	11.6	40.2	36.3	11.9	51.8	48.2	100 % 757 人
b. 専門職者をmajiedaワークショップ形式 （専門職者による講義に加え、参加者も実習形式で参加する形式）	14.0	43.0	32.8	10.2	57.0	43.0	100 % 758 人
c. 子育て経験者や『子ども交流館』の職員を中心とした座談会形式 （子育て経験者や職員がまとめ役となって会話をを行う形式）	4.6	32.7	45.9	16.8	37.3	62.7	100 % 758 人
d. 子育て期にある親のみの茶話会形式 （とくにまとめ役を設定せず、参加者が気ままに話す形式）	3.8	24.2	48.9	23.1	28.0	72.0	100 % 757 人

aやbといった専門家が参加する実施形態への興味が高かったことについては、前項のとおり、「ぱぱ・ままサークル」の目的の中でも関心の高かった項目が「a. 子育てに関する学習機会の提供」および「c. 地域で働く専門職者との交流機会の提供」であったこと（表6-13）、ならびに、「ぱぱ・ままサークル」に期待する事柄として「b. 子育て支援等の情報が得られること」や「c. 子育てに関する知識をつけること」への期待が高かったこと（表6-15）とも共通しており、より専門性の高い知識や情報の取得への期待の表れだと見てよい。

とはいって、「a. 専門職者による講演会形式」よりも「b. 専門職者をmajiedaワークショップ形式」のほうが興味をもつ人が多いことから、「ぱぱ・ままサークル」では、単に専門家から知識や情報を受け取るだけではなく、何らかのかたちで保護者もいっしょに参加できるようなかたちが求められていると言つてよい。

なお、これら各実施形態に対する興味の度合いについても、子どもの学齢によって違いがあるのかどうかを検討するため、正確検定をおこなったが、いずれの形態においても子どもの学齢による有意な差は見られなかった。

さて、ここまで結果から、「ぱぱ・ままサークル」において期待されているのは、専門職者による知識や情報の提供であることが明らかとなった。では、より具体的には、小

中学生の保護者たちはどのような知識や情報を欲しているのだろうか。小中学生の保護者が興味をもちそうな 17 の学習テーマを挙げ、その興味の度合いを尋ねた。ただし、この学習テーマに関しては、項目数が多すぎるため、因子分析結果をもとに 4 つのカテゴリーに分けて解釈を加えることとしたい。

まず、学習テーマ 17 項目について因子分析（主因子法、バリマックス回転）をおこなった結果を表 6-19 に示す。

表 6-19 学習テーマの因子分析結果

	因子			
	1	2	3	4
g. 非行・いじめ	0.722	0.268	0.124	0.225
h. ひきこもり・不登校	0.714	0.264	0.221	0.179
i. 親から子どもへの暴力・子どもから親への暴力	0.577	0.176	0.336	0.176
f. 教育・学習指導・進路相談	0.471	0.412	0.143	0.137
m. ケータイ・インターネット	0.461	0.117	0.173	0.403
e. 子どもの恋愛・性	0.444	0.413	0.156	0.236
n. 親子を取り巻く社会環境	0.436	0.227	0.395	0.364
o. 親の働き方と子どもの発達との関係	0.420	0.272	0.383	0.239
b. 子どもの身体的な発達	0.281	0.740	0.146	0.110
a. 子どもの心理的な発達	0.311	0.645	0.127	0.027
c. 病気や怪我とその対処法	0.133	0.599	0.159	0.381
d. 食事や栄養	0.119	0.594	0.216	0.333
q. 子育ての歴史	0.202	0.152	0.757	0.128
r. 海外の子育て	0.089	0.124	0.732	0.093
p. 男性による子育て・父親の育児参加	0.294	0.159	0.546	0.156
k. 防災	0.240	0.218	0.195	0.825
j. 防犯	0.278	0.222	0.138	0.753

因子抽出法：主因子法

回転法：Kaiser の正規化を伴うバリマックス法

表 6-19 のとおり、17 の学習テーマは 4 因子に分かれた。第一因子は、非行やいじめ、ひきこもり、家庭内暴力、インターネット、性など、多様な要素からなるため、便宜的に家族に関連する「社会問題要因」因子と名づけた。第二因子は、子どもの身体的・心理的発達、病気や怪我、食事や栄養からなるため、「衛生保健」因子と名づけた。第三因子は、子育ての歴史、海外の子育て、男性の育児参加等からなるため、子育ての「背景知」因子と名づけた。第四因子は、防災と防犯からなるため、そのまま「防犯・防災」因子と名づけた。

以下では、これらの因子ごとに学習テーマをグループ化し、単純集計結果を見ていくこととしたい。表 6-20 は、それぞれの学習テーマに対し、保護者がどの程度興味をもっているかを尋ねた結果である。

4 因子中、総じてもっとも興味の度合いが高いのは、「衛生保健」に関する項目である。とくに「a. 子どもの心理的な発達」は、過半数の人が「興味がある」と回答しており、「やや興味がある」と合わせると約 95% の人が関心を寄せている。こうした項目への関心の高さは、反抗期や思春期といった複雑で難しい年頃の子どもをもつ親の不安の表れとして捉えることもできるように思える。また、a 以外の 3 項目（「b. 子どもの身体的な発達」「c. 病気や怪我とその対処法」「d. 食事や栄養」）についても、いずれも 8 割以上の人気が「興味がある」と回答しており、総じて、子どもの発達に対する保護者の関心は高いと見てよいだろう。

さらに、「社会問題要因」および「防犯・防災」の 2 因子に対する保護者の興味もまた、比較的高めであった。

非行・いじめ・不登校件数はいずれも中学生のほうが多い¹³。そうであるにもかかわらず、小学生の保護者の方がこうした学習テーマにより強く興味をもつのは、低年齢の子どもをもつ保護者の、子どもの将来に対する漠然とした不安のあらわれなのではないだろうか。つまり、子どもの今後の学校生活がどのように変化していくのか予測がつかず、何があるかわからぬため、さまざまな場合に対処できるよう事前に知識を蓄えておきたいという気持ちのあらわれとして理解できる。

また、「f. 教育・学習指導・進路相談」では、小学生の保護者に比べ、中学生の保護者の方が「興味がある」と回答した人が多かった。中学校は、小学校以上に学習内容が難しくなることに加え、進路選択もしなくてはならなくなるがゆえに、こうした結果となったのだと思われる。

次に、「衛生保健」因子では、「b. 子どもの身体的な発達」で有意水準 1%での、「c. 病気や怪我とその対処法」で有意水準 0.1%での差が見られた。いずれも、中学生の保護者よりも小学生の保護者の方がより強い興味を示していることがわかる。これはやはり、小学生は身体的にまだ成熟していないがゆえに怪我や病気をしやすく、今後の成長過程も気になるからであろう。

第三因子である「背景知」では、いずれの項目においても有意な差は見られなかった。ここに分類される 3 項目は、先にも述べたとおり、教養的な知識や情報なのであり、子育てに直接役立つような情報ではないため、子どもの学齢によって左右されることがないのであろう。

「防犯・防災」因子では、「j. 防犯」において、4 件法のままで 5% 水準の、2 カテゴリーにまとめた場合で 1% 水準の有意な差が見られた。また、「k. 防災」では、2 カテゴリーにまとめた場合にのみ、10% 水準での有意傾向が確認された。いずれも、中学生の保護者よりも小学生の保護者の方が強い興味を示している。これは、低年齢の子どものリスク認知能力およびリスク管理能力の低さを保護者が心配した結果であると考えられる¹⁴。

6. 2. 6 まとめ

本節では、第 1 項および第 2 項では、交流館それ自体に対する認知度や利用頻度、期待等について、第 3 項から第 5 項にかけては、交流館が新たに立ち上げた事業「ぱぱ・ままサークル」への期待度や期待内容等について分析してきた。以下では簡単に、ここまで明らかになったことをまとめていく。

まず、第 1 項・第 2 項をとおし、交流館の認知度はかなり高いこと、大多数の保護者は一度は交流館を訪れたことがあるなどといった交流館の利用実態が明らかにされた。

¹³ 文部科学省による「平成 22 年度 児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」によれば、いじめの認知件数は、小学校で 36,909 件（1 校あたり 1.7 件）、中学校で 33,323 件（1 校あたり 3.1 件）となっており、不登校児童数は、小学生で 22,463 人（全小学生数の 0.32%）、中学生で 97,428 人（全中学生の 2.73%）となっている（文部科学省 2012）。また、警察庁による「平成 24 年中における少年の補導及び保護の概況」によれば、平成 24 年中に補導された小学生は 3,946 人、検挙および補導された中学生は 30,894 人（刑法犯少年 20,908 人 + 触法少年 9,986 人）となっている（警察庁生活安全局少年課 2013）。

¹⁴ 低年齢の子どもの方が犯罪に巻き込まれやすいという言説もあるが、注 13 と同様、統計上は中学生の方が犯罪被害に遭いやすい。警察庁（2013）の「平成 24 年の犯罪情勢」によれば、平成 24 年中の犯罪被害件数は、小学生で 18,955 件（人口 10 万人あたり 280.19 件）、中学生で 46,388 件（人口 10 万人あたり 1,305.6 件）となっている。暴行・傷害・窃盗・強制わいせつなど、ほとんどの罪種において中学生の方が小学生よりも被害件数が多いが、唯一、「略取・誘拐」においては、小学生の方が中学生よりも被害件数が多くなっている（小学生：61 件、中学生：21 件）。

また、保護者が交流館に対しもっとも期待しているのは、子どもが安全な場所で楽しく遊べるということであった。こうした期待を裏づけるように、交流館が千葉市の施設であり、遊び場に指導員がついていることに対する保護者の安心感は高い。唯一、難点を示すならば、それは交流館の立地環境にある。街中にある交流館へ子どもだけで通わせることに不安を感じる保護者もまた多かった。千葉市には児童館に相当する施設が他にないため、交流館が家から距離がある場合にはなおさら、子どもを交流館に通わせることに対し、不安を感じている保護者が多い。本文中でも述べたとおり、立地環境は交流館の力だけで改善できるものではないが、交流館に対する保護者からの期待や需要は高いため、こうした点に対する何らかの対処策を講じることで、交流館はいっそう市民に親しみやすい施設になると思われる。

次に、第3項から第5項をとおしてわかったことについてまとめていく。

まず、表6-1-1にあったように、「パパ・ママサークル」事業を簡単に説明しただけの状態では、それに参加したいと考える人は半数に満たなかった。しかしながら、その後の分析によって明らかになっていくように、だからといって小中学生の保護者が「パパ・ママサークル」に対し、何のニーズももっていないというわけではない。

表6-1-1における参加希望者の少なさは、おそらく、子育てサークルのイメージによつてもたらされたものだと考えられる。一般的には、子育てサークルといえば、子育て中の保護者が集まって情報交換をする、あるいは、パパ友・ママ友をつくる、気ままに談話をする、といったイメージがある。しかしながら、表6-1-3・14・17等から明らかになつたように、こうした、パパ友・ママ友づくりや、子育て仲間の間での情報交換や談話といった運営方法への需要や期待は少ない。そのため、こうしたイメージが先行する場合には、参加希望者は少なくなると考えられる。

では、どのようなかたちであれば、参加者の増加が見込まれるのだろうか。保護者のニーズは比較的一貫している。すなわち、専門職者を呼び、講演会形式あるいはワークショップ形式で、子育てに関する知識や支援情報を獲得できるようなかたちでのサークル運営が望まれている。一般の子育てサークルの場合には、毎月のように専門職者を呼ぶということはなかなか難しいが、千葉市の施設として位置づけられる交流館ではそれが可能である¹⁵。

こうした保護者のニーズに沿った事業を展開することで、表6-1-1で「参加したい」と答えた人以上の人数の動員が見込まれるのではないだろうか。

以上を総括するに、交流館はやはり、千葉市の施設であるという点にその強みがあるようと思われる。千葉市の施設であるからこそ提供できる安心感、そして専門的な知識や情報など、いずれに対しても保護者からの期待は強い。

また、こうした交流館への信頼や期待は、翻って言えば、千葉市に対する市民の信頼や期待のあらわれでもある。本調査からは、交流館に対する信頼や期待だけでなく、千葉市民の行政に対する信頼や期待の高さもまた明らかになったと言えるだろう。

¹⁵ 実際、2013年度の「パパ・ママサークル」では、毎月ではないものの、そのほとんどを専門職者を招いて行ったようである。

【引用参考文献】

- 牧野カツコ, 1982, 「乳幼児をもつ母親の<育児不安>」家庭教育研究所紀要 3:34-56.
- 淑徳大学総合福祉学部人間科学科, 2012, 『フィールドワーク調査報告書 第8号』。
(=web版：<http://www.shukutoku.ac.jp/sougou/shakai/h22fieldwork8.pdf>)
- 淑徳大学総合福祉学部人間科学科, 2013, 『フィールドワーク調査報告書 第9号』。
(=web版：<http://www.shukutoku.ac.jp/sougou/shakai/h23fieldwork9.pdf>)
- 山本功, 2013, 「『安全・安心』というるつぼ」, 中川伸俊・赤川学編, 『方法としての構築主義』勁草書房, 36-51.

【引用参考URL】

- 千葉市, 2013, 「子育てナビ」 <http://chiba-city.mamafre.jp/> (最終閲覧日：2013/11/26)
- 千葉市議会「会議録の検索と閲覧」 <http://asp.db-search.com/chiba-c/> (最終閲覧日：2013/11/26)
- 千葉市子ども交流館 <http://www.kodomo-koryukan.jp/> (最終閲覧日：2013/11/26)
- 千葉市こども未来局こども未来部こども企画課, 2003, 「夢はぐくむ ちば 子どもプラン」概要版
<http://www.city.chiba.jp/kodomomirai/kodomomirai/kikaku/download/digest.pdf> (最終閲覧日：
2013/11/26)
- 千葉市こども未来局こども未来部こども企画課, 2013, 「千葉市次世代育成支援行動計画インデックス」
<http://www.city.chiba.jp/kodomomirai/kodomomirai/kikaku/keikakuindex.html> (最終閲覧日：
2013/11/26)
- 千葉市保健福祉局健康部健康支援課, 2013, 「子育てサークル一覧表」
<http://www.city.chiba.jp/hokenfukushi/kenkou/shien/t-itiran.html> (最終閲覧日：2013/11/26)
- 警察庁, 2013, 「平成24年の犯罪情勢」
<http://www.npa.go.jp/toukei/seianki/h24hanzaizyousei.pdf> (最終閲覧日：2014/01/26)
- 警察庁生活安全局少年課, 2013, 「平成24年中における少年の補導及び保護の概況」
http://www.npa.go.jp/safetylife/syonen/hodouhogo_gaiyou_H24.pdf (最終閲覧日：2014/01/26)
- 内閣府, 2013, 「平成24年度 青少年のインターネット利用環境実態調査 調査結果(速報)」
<http://www8.cao.go.jp/youth/youth-harm/chousa/h24/net-jittai/pdf/kekka.pdf> (最終閲覧日：
2014/01/26)
- 文部科学省, 2012, 「平成22年度『児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査』について」
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/24/02/_icsFiles/afielddfile/2012/02/06/1315950_01.pdf
(最終閲覧日：2014/01/26)

あとがき

本科目「社会調査実習」は、(社) 社会調査協会によって認定される「社会調査士」資格を取得するための必須科目となっており、社会調査協会の定めるところによれば、本科目（＝社会調査協会が指定する「社会調査の実習を中心とする科目」）には、年間 30 回の授業を必要とする。

「社会調査実習」はコミュニティ政策学部のカリキュラム編成上、前期に週 2 コマ、計 30 回という形をとることとなった。しかし、社会調査の実習科目では、「半期」という開講期間の短さは致命的である。というのも、(これも「はしがき」にあるが) 調査実習の授業では、研究テーマの設定から仮説の検討、調査の方法的枠組みと分析方法の検討、調査対象の選定と調査票の作成、実査、データの集計、結果の解析、そして報告書による成果の公表と、やらなくてはいけないことが山積みだからだ。とくに、本科目のように一般市民を対象とした調査では、調査対象者の選定は住民基本台帳を用いておこなうのが通常であるが、そのためには、調査票を完成させた上で区役所に住民基本台帳閲覧の申請手続きを行い、申請許可がおりるのを待って閲覧に行く、という過程を踏まなくてはならず、最低でも 3 ヶ月という期間を必要とする。

そのため、コミュニティ政策学部の「社会調査実習」では、時間的な制約から、住民基本台帳を用いた対象者の選定を行うことはできず、どのような方法でどのような対象に調査をおこなうかは、科目開講以来、スタッフ側にとって頭の痛い問題となっている。

今年度も同様に、調査の企画について考えあぐねていたさい、千葉市中央区にある「千葉市子ども交流館」が、乳幼児から高校生までという幅広い年齢層の保護者を対象に「子育てばば・ままサークル」という新たな事業を展開したという情報を耳にした。

私たちは早速「千葉市子ども交流館」に赴き、新事業のニーズ調査とともに、親子のかかわりのありようや子育て期にある保護者の育児不安について調査をさせていただけるよう願い出た。「千葉市子ども交流館」は、快く調査へのご許可をくださるとともに、「千葉市こども未来局こども企画課」の担当者を紹介してくださるなど、さまざまなご支援をくださった。

さらには、「千葉市子ども交流館」の紹介でお会いした「こども企画課」の方もまた、千葉市内の子どもたちを取り巻く環境等、調査票を作成する上で非常に参考となるお話を聞かせてくださったり、私たちの調査がより順調に進むようにと、千葉市教育委員会の職員の方を紹介してくださったりと、惜しげもなくたくさんのご助力をくださった。

千葉市教育委員会の職員の方も同様に、お忙しい中、私たちの作成した調査票へご意見をくださったり、千葉市中央区の小学校長会ならびに中学校長会の会長にお話をとおしてくださるなど、さまざまな支援をくださった。教育委員会のこうした協力がなければ、今回の調査をこれほど短期間のうちに進めることはできなかつた。

さらには、小学校長会・中学校長会の会長をはじめとする各小中学校の校長先生、また、調査依頼に訪れた私たちに対応してくださった各学校の先生方、そして調査票を配布くださった学級担任の先生方など、千葉市内の小中学校に勤める多くの先生方が、お忙しい中、嫌な顔ひとつせずに調査へのご協力をくださった。今回の調査は、こうしたたくさんの先生方のご協力なしには成り立たなかつた。

また、アンケートを持ち帰り、保護者にお渡しくださった小中学生の皆様、お忙しい中、時間を割いてアンケートに回答をくださった保護者の方々にも、厚くお礼申し上げる。

本調査は、こうしたさまざまな人びとのご厚意やご協力によって支えられている。ご協力を賜った多くの皆様には、心より感謝申し上げたい。

本報告書が、こうした皆様のご厚意やご協力に、少しでも報いることができることを願ってやまない。

平成 26 年 3 月

社会調査助手 佐藤麻衣

基 础 集 計 表

A 1. あなたご自身のことをお聞きします。

a. 話し好きである

	あてはまる	どちらかというと あてはまる	どちらかというと あてはまらない	あてはまらない	合計
小学生の親	126 24.1%	254 48.7%	120 23.0%	22 4.2%	522 100.0%
中学生の親	58 25.1%	104 45.0%	58 25.1%	11 4.8%	231 100.0%
合計	184 24.4%	358 47.5%	178 23.6%	33 4.4%	753 100.0%

b. なるべく人に会わないでいたいと思う

	あてはまる	どちらかというと あてはまる	どちらかというと あてはまらない	あてはまらない	合計
小学生の親	21 4.0%	135 25.9%	239 45.8%	127 24.3%	522 100.0%
中学生の親	8 3.5%	74 32.3%	98 42.8%	49 21.4%	229 100.0%
合計	29 3.9%	209 27.8%	337 44.9%	176 23.4%	751 100.0%

c. 人と広く付き合うほうだ

	あてはまる	どちらかというと あてはまる	どちらかというと あてはまらない	あてはまらない	合計
小学生の親	70 13.4%	197 37.7%	201 38.5%	54 10.3%	522 100.0%
中学生の親	34 14.8%	74 32.2%	87 37.8%	35 15.2%	230 100.0%
合計	104 13.8%	271 36.0%	288 38.3%	89 11.8%	752 100.0%

d. 陽気である

	あてはまる	どちらかというと あてはまる	どちらかというと あてはまらない	あてはまらない	合計
小学生の親	100 19.2%	283 54.2%	124 23.8%	15 2.9%	522 100.0%
中学生の親	51 22.2%	106 46.1%	64 27.8%	9 3.9%	230 100.0%
合計	151 20.1%	389 51.7%	188 25.0%	24 3.2%	752 100.0%

e. 話題には事欠かないほうだ

	あてはまる	どちらかというと あてはまる	どちらかというと あてはまらない	あてはまらない	合計
小学生の親	48 9.2%	203 38.9%	213 40.8%	58 11.1%	522 100.0%
中学生の親	26 11.3%	84 36.5%	85 37.0%	35 15.2%	230 100.0%
合計	74 9.8%	287 38.2%	298 39.6%	93 12.4%	752 100.0%

B 1. 子育てをしているなかで次の a～k のようなことを感じたことがありますか。

a. どのようにしつけたらよいかわからない

	あてはまる	どちらかというと あてはまる	どちらかというと あてはまらない	あてはまらない	合計
小学生の親	77 14.7%	212 40.5%	185 35.3%	50 9.5%	524 100.0%
中学生の親	28 12.2%	73 31.7%	91 39.6%	38 16.5%	230 100.0%
合計	105 13.9%	285 37.8%	276 36.6%	88 11.7%	754 100.0%

b. 子育てについて心配なことがある

	あてはまる	どちらかというと あてはまる	どちらかというと あてはまらない	あてはまらない	合計
小学生の親	108 20.6%	238 45.4%	148 28.2%	30 5.7%	524 100.0%
中学生の親	54 23.5%	97 42.2%	59 25.7%	20 8.7%	230 100.0%
合計	162 21.5%	335 44.4%	207 27.5%	50 6.6%	754 100.0%

c. 子育てに自信がもてない

	あてはまる	どちらかというと あてはまる	どちらかというと あてはまらない	あてはまらない	合計
小学生の親	65 12.4%	185 35.4%	206 39.4%	67 12.8%	523 100.0%
中学生の親	26 11.3%	76 32.9%	97 42.0%	32 13.9%	231 100.0%
合計	91 12.1%	261 34.6%	303 40.2%	99 13.1%	754 100.0%

d. 子どものことでどうしたらよいかわからなくなる

	あてはまる	どちらかというと あてはまる	どちらかというと あてはまらない	あてはまらない	合計
小学生の親	74 14.2%	201 38.6%	185 35.5%	61 11.7%	521 100.0%
中学生の親	31 13.5%	67 29.1%	95 41.3%	37 16.1%	230 100.0%
合計	105 14.0%	268 35.7%	280 37.3%	98 13.0%	751 100.0%

e. 親として不適格と感じる

	あてはまる	どちらかというと あてはまる	どちらかというと あてはまらない	あてはまらない	合計
小学生の親	55 10.5%	169 32.4%	207 39.7%	91 17.4%	522 100.0%
中学生の親	29 12.6%	57 24.8%	99 43.0%	45 19.6%	230 100.0%
合計	84 11.2%	226 30.1%	306 40.7%	136 18.1%	752 100.0%

f. 子育てに困難を感じる

	あてはまる	どちらかというと あてはまる	どちらかというと あてはまらない	あてはまらない	合計
小学生の親	44 8.4%	127 24.4%	223 42.8%	127 24.4%	521 100.0%
中学生の親	26 11.3%	51 22.2%	95 41.3%	58 25.2%	230 100.0%
合計	70 9.3%	178 23.7%	318 42.3%	185 24.6%	751 100.0%

g. よその子どもと比べて落ち込んだり自信をなくしたりする

	あてはまる	どちらかというと あてはまる	どちらかというと あてはまらない	あてはまらない	合計
小学生の親	43 8.2%	108 20.6%	228 43.5%	145 27.7%	524 100.0%
中学生の親	16 6.9%	50 21.6%	79 34.2%	86 37.2%	231 100.0%
合計	59 7.8%	158 20.9%	307 40.7%	231 30.6%	755 100.0%

h. 子どもを育てるために我慢ばかりしていると思う

	あてはまる	どちらかというと あてはまる	どちらかというと あてはまらない	あてはまらない	合計
小学生の親	14 2.7%	90 17.2%	249 47.7%	169 32.4%	522 100.0%
中学生の親	11 4.8%	32 13.9%	107 46.3%	81 35.1%	231 100.0%
合計	25 3.3%	122 16.2%	356 47.3%	250 33.2%	753 100.0%

i. 子どもを育てることが負担である

	あてはまる	どちらかというと あてはまる	どちらかというと あてはまらない	あてはまらない	合計
小学生の親	10 1.9%	46 8.8%	211 40.5%	254 48.8%	521 100.0%
中学生の親	10 4.3%	20 8.7%	84 36.4%	117 50.6%	231 100.0%
合計	20 2.7%	66 8.8%	295 39.2%	371 49.3%	752 100.0%

f. 食事・栄養

	不安	どちらかというと不安	どちらかというと不安でない	不安でない	合計
小学生の親	36 6.9%	128 24.5%	222 42.4%	137 26.2%	523 100.0%
中学生の親	16 6.9%	49 21.2%	99 42.9%	67 29.0%	231 100.0%
合計	52 6.90%	177 23.50%	321 42.60%	204 27.10%	754 100.00%

g. 健康

	不安	どちらかというと不安	どちらかというと不安でない	不安でない	合計
小学生の親	29 5.6%	108 20.7%	244 46.8%	140 26.9%	521 100.0%
中学生の親	12 5.2%	53 22.9%	103 44.6%	63 27.3%	231 100.0%
合計	41 5.5%	161 21.4%	347 46.1%	203 27.0%	752 100.0%

h. 衣服・身だしなみ

	不安	どちらかというと不安	どちらかというと不安でない	不安でない	合計
小学生の親	13 2.5%	58 11.1%	254 48.7%	197 37.7%	522 100.0%
中学生の親	5 2.2%	30 13.0%	118 51.1%	78 33.8%	231 100.0%
合計	18 2.4%	88 11.7%	372 49.4%	275 36.5%	753 100.0%

C 1. 現在、子育てに関する話ができる友人は何人くらいいますか。

	小学生の親	中学生の親	合計
度数	520	225	752
最小値	0	0	0
最大値	100	80	100
平均値	6.93	5.48	6.49
中央値	5	5	5
最頻値	5	5	5
標準偏差	5.745	4.709	5.47
歪度	2.65	4.245	2.98
尖度	11.056	35.19	15.09

※平均値以下は、80人および100人という回答（各1人）を除いたもの

C 2. あなたと現在子育て中の保護者との間で、次のa～dのようなやりとりはどの程度ありますか。

a. 子育てを手助けされること

	よくある	ときどきある	あまりない	まったくない	合計
小学生の親	92 17.6%	215 41.2%	160 30.7%	55 10.5%	522 100.0%
中学生の親	28 12.2%	75 32.6%	85 37.0%	42 18.3%	230 100.0%
合計	120 16.0%	290 38.6%	245 32.6%	97 12.9%	752 100.0%

b. 子育てに関する情報を教えられること

	よくある	ときどきある	あまりない	まったくない	合計
小学生の親	184 35.2%	257 49.2%	67 12.8%	14 2.7%	522 100.0%
中学生の親	53 23.1%	131 57.2%	31 13.5%	14 6.1%	229 100.0%
合計	237 31.6%	388 51.7%	98 13.0%	28 3.7%	751 100.0%

c. 心配事や悩み事を聞いてもらうこと

	よくある	ときどきある	あまりない	まったくない	合計
小学生の親	187 35.8%	237 45.4%	77 14.8%	21 4.0%	522 100.0%
中学生の親	55 23.9%	119 51.7%	44 19.1%	12 5.2%	230 100.0%
合計	242 32.2%	356 47.3%	121 16.1%	33 4.4%	752 100.0%

d. 褒められることや励まされること

	よくある	ときどきある	あまりない	まったくない	合計
小学生の親	114 21.8%	285 54.6%	91 17.4%	32 6.1%	522 100.0%
中学生の親	38 16.5%	113 49.1%	58 25.2%	21 9.1%	230 100.0%
合計	152 20.2%	398 52.9%	149 19.8%	53 7.0%	752 100.0%

D 2. あなたは普段、お子さんとどのように過ごしていますか。

a. 子どもとよく会話をする

	あてはまる	どちらかというとあてはまる	どちらかというとあてはまらない	あてはまらない	合計
小学生の親	262 49.7%	224 42.5%	40 7.6%	1 0.2%	527 100.0%
中学生の親	103 44.8%	95 41.3%	31 13.5%	1 0.4%	230 100.0%
合計	365 48.2%	319 42.1%	71 9.4%	2 0.3%	757 100.0%

b. 子どもとよく一緒にご飯を食べる

	あてはまる	どちらかというとあてはまる	どちらかというとあてはまらない	あてはまらない	合計
小学生の親	406 77.0%	100 19.0%	21 4.0%	0 0.0%	527 100.0%
中学生の親	147 63.9%	64 27.8%	15 6.5%	4 1.7%	230 100.0%
合計	553 73.1%	164 21.7%	36 4.8%	4 0.5%	757 100.0%

c. 子どもとよく遊ぶ

	あてはまる	どちらかというとあてはまる	どちらかというとあてはまらない	あてはまらない	合計
小学生の親	106 20.1%	223 42.3%	184 34.9%	14 2.7%	527 100.0%
中学生の親	22 9.5%	74 32.0%	103 44.6%	32 13.9%	231 100.0%
合計	128 16.9%	297 39.2%	287 37.9%	46 6.1%	758 100.0%

d. 子どもとよく一緒に勉強をする

	あてはまる	どちらかというとあてはまる	どちらかというとあてはまらない	あてはまらない	合計
小学生の親	155 29.4%	250 47.4%	109 20.7%	13 2.5%	527 100.0%
中学生の親	9 3.9%	54 23.4%	106 45.9%	62 26.8%	231 100.0%
合計	164 21.6%	304 40.1%	215 28.4%	75 9.9%	758 100.0%

e. 子どもとよく一緒にテレビを見る

	あてはまる	どちらかというとあてはまる	どちらかというとあてはまらない	あてはまらない	合計
小学生の親	182 34.5%	241 45.7%	85 16.1%	19 3.6%	527 100.0%
中学生の親	81 35.1%	98 42.4%	44 19.0%	8 3.5%	231 100.0%
合計	263 34.7%	339 44.7%	129 17.0%	27 3.6%	758 100.0%

r. 海外の子育て

	興味がある	やや興味がある	あまり興味がない	興味がない	合計
小学生の親	80 15.4%	168 32.2%	191 36.7%	82 15.7%	521 100.0%
中学生の親	34 14.8%	67 29.1%	81 35.2%	48 20.9%	230 100.0%
合計	114 15.2%	235 31.3%	272 36.2%	130 17.3%	751 100.0%

H 1. あなたの性別をお聞きします。

	男	女	合計
小学生の親	22 4.2%	504 95.8%	526 100.0%
中学生の親	13 5.7%	216 94.3%	229 100.0%
合計	35 4.6%	720 95.4%	755 100.0%

H 2. あなたの年齢をお聞きします。

	20～24歳	25～29歳	30～34歳	35～39歳	40～44歳	45～49歳	50～54歳	55～59歳	合計
小学生の親	1 0.2%	13 2.5%	78 14.9%	213 40.6%	179 34.1%	36 6.9%	5 1.0%	0 0.0%	525 100.0%
中学生の親	0 0.0%	0 0.0%	5 2.2%	27 11.8%	98 42.8%	77 33.6%	20 8.7%	2 0.9%	229 100.0%
合計	1 0.1%	13 1.7%	83 11.0%	240 31.8%	277 36.7%	113 15.0%	25 3.3%	2 0.3%	754 100.0%

H 3. あなたは現在、どなたといっしょにお住まいですか。(複数回答)

1 配偶者(パートナー)

	同居している	同居していない	合計
小学生の親	481 91.3%	46 8.7%	527 100.0%
中学生の親	194 84.0%	37 16.0%	231 100.0%
合計	675 89.1%	83 10.9%	758 100.0%

2 自分の／配偶者の母親

	同居している	同居していない	合計
小学生の親	53 10.1%	474 89.9%	527 100.0%
中学生の親	33 14.3%	198 85.7%	231 100.0%
合計	86 11.3%	672 88.7%	758 100.0%

3 自分の／配偶者の父親

	同居している	同居していない	合計
小学生の親	39 7.4%	488 92.6%	527 100.0%
中学生の親	20 8.7%	211 91.3%	231 100.0%
合計	59 7.8%	699 92.2%	758 100.0%

4 自分の／配偶者のきょうだい

	同居している	同居していない	合計
小学生の親	7 1.3%	520 98.7%	527 100.0%
中学生の親	2 0.9%	229 99.1%	231 100.0%
合計	9 1.2%	749 98.8%	758 100.0%

5 自分の／配偶者の祖父母

	同居している	同居していない	合計
小学生の親	6 1.1%	521 98.9%	527 100.0%
中学生の親	4 1.7%	227 98.3%	231 100.0%
合計	10 1.3%	748 98.7%	758 100.0%

6 その他

	同居している	同居していない	合計
小学生の親	5 0.9%	522 99.1%	527 100.0%
中学生の親	0 0.0%	231 100.0%	231 100.0%
合計	5 0.7%	753 99.3%	758 100.0%

H 4. あなたには何人のお子さんがいますか。

	1人	2人	3人	4人以上	合計
小学生の親	91 17.3%	312 59.4%	103 19.6%	19 3.6%	525 100.0%
中学生の親	44 19.3%	118 51.8%	50 21.9%	16 7.0%	228 100.0%
合計	135 17.9%	430 57.1%	153 20.3%	35 4.6%	753 100.0%

H 5. あなたのお子さんの学齢は、下記の1～5のうちどれにあてはまりますか。

(複数回答)

1 3歳未満

	あてはまる	あてはまらない	合計
小学生の親	67 12.8%	458 87.2%	525 100.0%
中学生の親	4 1.7%	225 98.3%	229 100.0%
合計	71 9.4%	683 90.6%	754 100.0%

2 3歳～小学校入学前

	あてはまる	あてはまらない	合計
小学生の親	183 34.9%	342 65.1%	525 100.0%
中学生の親	22 9.6%	207 90.4%	229 100.0%
合計	205 27.2%	549 72.8%	754 100.0%

3 小学生

	あてはまる	あてはまらない	合計
小学生の親	525 100.0%	0 0.0%	525 100.0%
中学生の親	97 42.4%	132 57.6%	229 100.0%
合計	622 82.5%	132 17.5%	754 100.0%

4 中学生

	あてはまる	あてはまらない	合計
小学生の親	53 10.1%	472 89.9%	525 100.0%
中学生の親	229 100.0%	0 0.0%	229 100.0%
合計	282 37.4%	472 62.6%	754 100.0%

5 高校生以上

	あてはまる	あてはまらない	合計
小学生の親	20 3.8%	505 96.2%	525 100.0%
中学生の親	88 38.4%	141 61.6%	229 100.0%
合計	108 14.3%	646 85.7%	754 100.0%

H 6. あなたは現在、お仕事をされていますか。

	会社員	公務員	自営業	専門職	パート・ アルバイト	働いている －その他	専業主婦 (主夫)	無職	働いていない －その他	合計
小学生の親	119 22.7%	28 5.3%	16 3.1%	7 1.3%	119 22.7%	15 2.9%	210 40.1%	7 1.3%	3 0.6%	524 100.0%
中学生の親	50 21.9%	10 4.4%	18 7.9%	2 0.9%	79 34.6%	8 3.5%	59 25.9%	2 0.9%	0 0.0%	228 100.0%
合計	169 22.5%	38 5.1%	34 4.5%	9 1.2%	198 26.3%	23 3.1%	269 35.8%	9 1.2%	3 0.4%	752 100.0%

付問 あなたは週に何時間くらい仕事をしていますか。

	小学生の親	中学生の親	合計
度数	300	161	461
最小値	1	5	1
最大値	75	72	75
平均値	28.444	31.23	29.47
中央値	30	30	30
最頻値	40	20	40
標準偏差	14.8069	15.4526	15.07
歪度	0.232	0.332	0.27
尖度	-0.691	-0.703	-0.68

調查票

子育てに関するアンケート

アンケートのお願い

このアンケートは、小中学生のお子さんをお持ちの皆様の、子育てに関する不安や悩み、お子さんとの過ごし方、「千葉市子ども交流館」の認知度やそこで行われている事業のニーズ等をお聞きするものです。

それらをお聞きすることをとおして、少しでも、皆様の生活や子育てのお役に立てればと考えています。

質問項目のなかには、家庭生活のご様子などをおうかがいするものもございますが、お差しつかえのない範囲でご記入いただけましたら幸いです。

お忙しい中、誠に恐縮ですが、何卒ご協力くださいますよう、よろしくお願ひ申し上げます。

ご記入にあたってのご注意

回答のしかたは、それぞれの質問によって、選択肢に「○」をつけていただくものと、直接〔 〕の中に数字等をご記入いただくものがあります。どの回答が正しいとか、すぐれているとかいったことはありませんので、ご自身のありのままのお気持ちや状態をお答えください。

※ 回答いただいたアンケートは、平成25年7月16日（火）までに、同封の返信用封筒にてご返送ください。

なお、このアンケート調査についてご不明な点や、ご質問がございましたら下記までお問い合わせください。

調査責任者　： 淑徳大学教授　榎瀬俊子
社会調査助手　佐藤麻衣

連絡先　： 淑徳大学コミュニティ政策学部
〒260-8701 千葉市中央区大巖寺町200
043-265-7331（内線559）
fieldwrk@soc.shukutoku.ac.jp

A 1. あなたご自身のことをお聞きします。次の a ~ e のそれぞれについて、下記の 1 ~ 4 のうちからあてはまるもの 1 つを選んで、その番号に○をつけてください。

	1 あてはまる	2 どちらかといふと あてはまる	3 どちらかといふと あてはまらない	4 あてはまらない
a. 話し好きである	1	2	3	4
b. なるべく人に会わないでいたいと思う	1	2	3	4
c. 人と広く付き合うほうだ	1	2	3	4
d. 陽気である	1	2	3	4
e. 話題には事欠かないほうだ	1	2	3	4

B 1. 子育てをしているなかで次の a ~ k のようなことを感じたことがありますか。下記の 1 ~ 4 のうちからあてはまるもの 1 つを選んで、その番号に○をつけてください。

	1 あてはまる	2 どちらかといふと あてはまる	3 どちらかといふと あてはまらない	4 あてはまらない
a. どのようにしつけたらよいかわからない	1	2	3	4
b. 子育てについて心配なことがある	1	2	3	4
c. 子育てに自信がもてない	1	2	3	4
d. 子どものことでどうしたらよいかわからなくなる	1	2	3	4
e. 親として不適格と感じる	1	2	3	4
f. 子育てに困難を感じる	1	2	3	4
g. よその子どもと比べて落ち込んだり自信をなくしたりする	1	2	3	4
h. 子どもを育てるために我慢ばかりしていると思う	1	2	3	4
i. 子どもを育てることが負担である	1	2	3	4
j. 自分ひとりで子どもを育てているのだという圧迫感を感じてしまう	1	2	3	4
k. 毎日毎日、同じことの繰り返ししかしていないと思う	1	2	3	4

B 2. 子育てについて、あなたはどのように不安を感じていますか。次のa～hのそれぞれについて、下記の1～4のうちからあてはまるもの1つを選んで、その番号に○をつけてください。

	1 不安	2 どちらかといえれば	3 どちらかでないえれば	4 不安でない
a. しつけ	1	2	3	4
b. 学力・成績	1	2	3	4
c. 進路・進学	1	2	3	4
d. 教育費	1	2	3	4
e. 非行・交友関係	1	2	3	4
f. 食事・栄養	1	2	3	4
g. 健康	1	2	3	4
h. 衣服・身だしなみ	1	2	3	4

C 1. 現在、子育てに関する話ができる友人は何人くらいですか。思い浮かんだ人の人数を[]内にお書きください。いない場合は[]に「0」とお書きください。

[] 人くらい

C 2. あなたと現在子育て中の保護者との間で、次のa～dのようなやりとりはどの程度ありますか。下記の1～4のうちからあてはまるもの1つを選んでその番号に○をつけてください。

	1 よくある	2 ときどきある	3 あまりない	4 まつたくない
a. 子育てを手助けされること	1	2	3	4
b. 子育てに関する情報を教えられること	1	2	3	4
c. 心配事や悩み事を聞いてもらうこと	1	2	3	4
d. 褒められることや励まされること	1	2	3	4

D 1. このアンケートは、中央区の小中学生を対象に行っておりますが、アンケートを持ち帰られたお子さんは小学生ですか、それとも中学生ですか。下記の1・2のうち、あてはまるもの1つを選んで、その番号に○をつけてください。

1 小学生

2 中学生

D 2. あなたは普段、お子さんとどのように過ごしていますか。次のa～gのそれぞれについて、下記の1～4のうちからあてはまるもの1つを選んで、その番号に○をつけてください。(※お子さんが複数いる場合には、このアンケートを持ち帰られたお子さんについてお答えください。)

	1 あてはまる	2 どちらかといふ あてはまる	3 どちらかといふ あてはまらない	4 あてはまらない
a. 子どもとよく会話をする	1	2	3	4
b. 子どもと一緒にご飯を食べる	1	2	3	4
c. 子どもとよく遊ぶ	1	2	3	4
d. 子どもと一緒に勉強をする	1	2	3	4
e. 子どもと一緒にテレビを見る	1	2	3	4
f. 子どもと一緒に買い物に行く	1	2	3	4
g. 子どもと一緒にレジャー や博物館等に出かける	1	2	3	4

D 3. あなたとお子さんとの関係についてお聞きします。次の a ~ k のそれぞれについて、下記の 1 ~ 4 のうちから あてはまるもの 1つを選んで、その番号に○をつけてください。(※お子さんが複数いる場合には、このアンケートを持ち帰られたお子さんについてお答えください。)

	1 あてはまる	2 どちらか あてはまる といふと	3 どちらか あてはまらない といふと	4 あてはまらない
a. 子どもの得意な科目を把握している	1	2	3	4
b. 子どもの苦手な科目を把握している	1	2	3	4
c. 子どもの友達の名前を知っている	1	2	3	4
d. 子どもが友達とどのように過ごしているか把握している	1	2	3	4
e. 子どもの好きな食べ物を知っている	1	2	3	4
f. 子どもの嫌いな食べ物を知っている	1	2	3	4
g. 子どもの好きな遊びを知っている	1	2	3	4
h. 子どもが落ち込んでいるときなどの感情に気づける	1	2	3	4
i. 子どもはよく親の言うことを聞いてくれる	1	2	3	4
j. 子どもは自らよくお手伝いをしてくれる	1	2	3	4
k. 子どもからよく感謝される	1	2	3	4

※ ここからは、以下の説明をお読みいただき、問い合わせにお答えください。
ご面倒とは存じますが、ご協力いただけますよう、何卒よろしくお願ひいたします。

千葉市には、乳幼児から高校生までの子どもの健全育成を目的にした「千葉市子ども交流館」（以下、「子ども交流館」とする）という施設があります。この施設には、体育館や学習室、図書室、音楽スタジオ、工作室、調理室、乳幼児向け遊戯場などがあり、0～18歳の子どもとその保護者は、いつでも自由に施設を利用できます（利用は無料です）。

小学生未満のお子さんには保護者の方に同伴をお願いしていますが、小学生以上のお子さんの場合は、子どもたちだけでの利用が可能です。また、土日などには、親子で参加できる各種イベントや講座なども開かれています。（詳細は同封のパンフレットをご覧ください。）

E 1. あなたは「子ども交流館」を知っていましたか。下記の1・2のうち、あてはまるもの1つを選んで、その番号に○をつけてください。

- 1 知っていた → 下記の「付問」「E 2」「E 3」にお答えください。
2 知らなかった → 次ページの「F 1」にお進みください。

E 1にて「1. 知っていた」と回答された方にお聞きします。

付問 あなたは「子ども交流館」をどのようにして知りましたか。下記の1～9のうちからあてはまるものすべてを選んで、その番号に○をつけてください。

- 1 千葉市の広報で見た
2 「子育てハンドブック」で見た
3 千葉市のホームページで見た
4 「Qiball（きぼーる）」のホームページで見た
5 他の保護者から聞いた
6 子どもから聞いた
7 子どもの通う学校の先生から聞いた
8 その他（具体的に： ）
9 覚えていない

E 2. あなたは「子ども交流館」を訪れたことがありますか。下記の1・2のうち、あてはまるもの1つを選んで、その番号に○をつけてください。

- 1 訪れたことがある → 次ページの「付問」にお答えください
2 訪れたことはない → 次ページの「E 3」にお進みください

E 2 にて「1. 訪れたことがある」と回答された方にお聞きします。

付問 あなたはどのようなときに「子ども交流館」を訪れましたか。下記の1～4のうちからあてはまるものすべてを選んで、その番号に○をつけてください。

- 1 親子で参加する講座に参加した
- 2 イベントに参加した
- 3 通常の開館日に、子どもを連れて行っていた
- 4 その他（具体的に：）

E 3. あなたのお子さんは、ここ1年の間に、どのくらいの頻度で「子ども交流館」を利用していましたか。下記の1～7のうちからあてはまるもの1つを選んで、その番号に○をつけてください。（お子さんが複数いる場合には、このアンケートを持ち帰られたお子さんについてお答えください。）

- | | |
|-----------------------------|--------------------|
| 1 月1回以上利用していた | 2 2～3ヶ月に1回程度利用していた |
| 3 半年に1回程度利用していた | 4 年に1回程度利用していた |
| 5 ここ1年間では利用していない | |
| 6 ここ1年の間で利用したことがあるかどうかわからない | |

F 1. あなたは、お子さんが「子ども交流館」を利用することについて、どのように思いますか。

次のa～gのそれぞれについて、下記の1～4のうちからあてはまるもの1つを選んで、その番号に○をつけてください。（お子さんが複数いる場合には、このアンケートを持ち帰られたお子さんについてお答えください。）

	1 そう 思う	2 や や そ う 思 う	3 あ ま り 思 わ な い	4 そ う 思 わ な い
a. 千葉市の施設なので安心して子どもを通わせられる	1	2	3	4
b. 遊び場に指導員がついているので安心して子どもを通わせられる	1	2	3	4
c. 街中にあるので、子どもだけで通わせることに不安を感じる	1	2	3	4
d. 家から「子ども交流館」までは距離があるので子どもだけで通わせることに不安を感じる	1	2	3	4
e. どのような施設なのかがわからず不安を感じる	1	2	3	4
f. 指導員がどのような人なのかがわからず不安を感じる	1	2	3	4
g. 子ども交流館で子どもがどのように過ごしているかわからず不安を感じる	1	2	3	4

F 2. お子さんが「子ども交流館」を利用することで、次のa～eのようなことをあなたはどの程度期待しますか。下記の1～4のうちからあてはまるもの1つを選んで、その番号に○をつけてください。(お子さんが複数いる場合には、このアンケートを持ち帰られたお子さんについてお答えください。)

	1 期待している	2 やや期待している	3 あまり期待していない	4 期待していない
a. 子どもが楽しめること	1	2	3	4
b. 子どもが安全な場で遊べること	1	2	3	4
c. 子どもが将来役に立つ知識を身につけること	1	2	3	4
d. 子どもに友達ができること	1	2	3	4
e. 子どもに居場所ができること	1	2	3	4

「子ども交流館」では毎月、複数の講座をおこなっていますが、親子で参加できる講座は、小学生未満のお子さんを対象とした講座が多くなっています。

F 3. 小学生や中学生を対象とした親子で参加できる講座を開いた場合、あなたはお子さんと一緒に参加したいと思いますか。下記の1～4のうちからあてはまるもの1つを選んで、その番号に○をつけてください。

1 ゼひ参加したい

2 参加したい

3 あまり参加したくない

4 参加したくない

※ 以下の説明をお読みいただき、問い合わせにお答えください。

「子ども交流館」では、今年の5月から、「子育てばば・ままサークル」（以下、「子育てサークル」とする）という事業を立ち上げました。

この事業は、0～18歳までのお子さんをお持ちの保護者の方々を対象に、子育てに関する学習機会の提供、保護者同士の交流機会の提供、地域で働く専門職者との交流機会の提供などを目的としています。

G 1. あなたは「子育てサークル」に参加してみたいと思いますか。下記の1～4のうちからあてはまるもの1つを選んで、その番号に○をつけてください。

- | | |
|-------------------|-------------------|
| 1 参加してみたい | 2 どちらかといえば参加してみたい |
| 3 どちらかといえば参加したくない | 4 参加したくない |

G 2. 「子育てサークル」が目的とするa～cの3つの項目について、あなたはどの程度興味がありますか。下記の1～4のうちからあてはまるもの1つを選んで、その番号に○をつけてください。

	1 興味 があ る	2 や 興味 があ る	3 あ ま り が な い	4 興味 が な い
a. 子育てに関する学習機会の提供	1	2	3	4
b. 保護者同士の交流機会の提供	1	2	3	4
c. 地域で働く専門職者との交流機会の提供	1	2	3	4

G 3. 「子育てサークル」の実施形態については、現在、a～dのような4つの案があります。あなたは、それぞれの実施形態について、どの程度興味がありますか。下記の1～4のうちからあてはまるもの1つを選んで、その番号に○をつけてください。

	1 興味 が ある	2 や 興味 が ある	3 あ 興味 が ない	4 興味 が ない
a. 専門職者による講演会形式 (専門職者がその専門分野について講演を行う形式)	1	2	3	4
b. 専門職者をmajiedaたワークショップ形式 (専門職者による講義に加え、参加者も実習形式で参加する形式)	1	2	3	4
c. 子育て経験者や「子ども交流館」の職員を中心とした座談会形式 (子育て経験者や職員がまとめ役となって会話をを行う形式)	1	2	3	4
d. 子育て期にある親のみの茶話会形式 (とくにまとめ役を設定せず、参加者が気ままに話す形式)	1	2	3	4

G 4. あなたが「子育てばば・ままサークル」に参加する場合、次のa～hのようなことをどの程度期待しますか。下記の1～4のうちからあてはまるもの1つを選んで、その番号に○をつけてください。

	1 期 待 す る	2 や 期 待 す る	3 あ 期 待 し な い	4 期 待 し な い
a. 子育ての悩みが解消されること	1	2	3	4
b. 子育て支援等の情報が得られること	1	2	3	4
c. 子育てに関する知識をつけること	1	2	3	4
d. 子育て以外に関する学びの場ができるこ	1	2	3	4
e. 子育てから離れた時間ができること	1	2	3	4
f. 子育て仲間（ばば友・まま友）ができるこ	1	2	3	4
g. 親子での交流ができるこ	1	2	3	4
h. 子どもに友だちができるこ	1	2	3	4

G 5. 次の a ~ r のような学習テーマについて、あなたはどの程度興味がありますか。下記の 1 ~ 4 のうちから あてはまるもの 1つを選んで、その番号に○をつけてください。

	1 興味 が ある	2 や 興味 が ある	3 あ まり 興味 が ない	4 興味 が ない
a. 子どもの心理的な発達	1	2	3	4
b. 子どもの身体的な発達	1	2	3	4
c. 病気や怪我とその対処法	1	2	3	4
d. 食事や栄養	1	2	3	4
e. 子どもの恋愛・性	1	2	3	4
f. 教育・学習指導・進路相談	1	2	3	4
g. 非行・いじめ	1	2	3	4
h. ひきこもり・不登校	1	2	3	4
i. 親から子どもへの暴力・子どもから親への暴力	1	2	3	4
j. 防犯	1	2	3	4
k. 防災	1	2	3	4
m. ケータイ・インターネット	1	2	3	4
n. 親子を取り巻く社会環境	1	2	3	4
o. 親の働き方と子どもの発達との関係	1	2	3	4
p. 男性による子育て・父親の育児参加	1	2	3	4
q. 子育ての歴史	1	2	3	4
r. 海外の子育て	1	2	3	4

※ 最後に、あなたご自身のことについてお聞きします。

H 1. あなたの性別をお聞きします。下記の 1・2 のうち、あてはまるもの 1つを選んで、その番号に○をつけてください。

1 男

2 女

H 2. あなたの年齢をお聞きします。下記の 1~9 のうちあてはまるもの 1つを選んで、その番号に○をつけてください。

1 20~24 歳

2 25~29 歳

3 30~34 歳

4 35~39 歳

5 40~44 歳

6 45~49 歳

7 50~54 歳

8 55~59 歳

9 60 歳以上

H 3. あなたは現在、どなたといっしょにお住まいですか。下記の 1~6 のうちあてはまるものすべてを選んで、その番号に○をつけてください。

1 配偶者（パートナー）

2 自分の／配偶者の母親

3 自分の／配偶者の父親

4 自分の／配偶者のきょうだい

5 自分の／配偶者の祖父母

6 その他（具体的に：

）

H 4. あなたには何人お子さんがいますか。下記の 1~4 のうちからあてはまるもの 1つを選んでその番号に○をつけてください。

1 1 人

2 2 人

3 3 人

4 4 人以上

H 5. あなたのお子さんの学齢は、下記の 1~5 のうちどれにあてはまりますか。あてはまるものすべてを選んで、○をつけてください

1 3 歳未満

2 3 歳～小学校入学前

3 小学生

4 中学生

5 高校生以上

H 6. あなたは現在、お仕事をされていますか。下記の1～7のうちからあてはまるもの1つを選んで、その番号に○をつけてください。

働いている方

- 1 会社員 2 公務員
3 自営業
4 その他（具体的に：)

下記の「付問」に
お答えください。

働いていない方

- 5 専業主婦（専業主夫） 6 無職
7 その他（具体的に：)

質問は以上で
終わりです。

付問 H 6 で「働いている」と回答された方（1～4を選ばれた方）にお聞きします。

あなたは週に何時間くらい仕事をしていますか。残業の時間も含め、[] 内に数字を記入してください。

週に [] 時間くらい

質問は以上で終わりです。ご協力、ありがとうございました。

平成 25 年度 社会調査実習報告書 第 2 号

発 行：2014 年 3 月 31 日

発行者：淑徳大学コミュニティ政策学部

〒260-8701

千葉市中央区大巖寺町 200

Tel 043-265-7331

印 刷：株式会社 正文社